

シェレー原詩
木村鷹太郎譯

ネムリグサ

一條成美画



東京
武林堂發行





Percy FitzGerald

序

花を愛するものは、何事か花の爲めに盡す所なかる可からず。余、性花を愛し、こゝにシエレーの含羞草の花園の詩を譯し、聊か愛花の情を表はす。

近時、世間が園藝を愛し、花を稱するの趣味を増加し來りしは大に慶すべきのこととなす。何となれば人を慰安し、精神

を高雅ならしむること花に若くものあらざればなり。然りと雖、趣味に高下あり深淺あり。世間一般の花を愛するや、素より優美高雅なるなきに非ずと雖、多くは感覺的程度に止まるものにして、未だ以つて、高きと深きとは、之れを稱するを得ざるなり。シエレーの花園百花爛熳、紅白あり、紫

黄あり、淺流あり、園亭あり、池水あり、綠蔭あり、其美已に樂園を想はしむるものありと雖、之に加ふるに此美なる花に依つて、花以上の「美」を認め、其美に對して「愛」の哲理を學び、又此樂しき園に依りて園以上の「調和」「秩序」及び「人生觀」等の念に至るとせば、あゝこれ普通の愛花者流よりは遙かに進みたるものにして、感覺美

を超えて、精神美の域に向ひ、花に對する趣味一層高く、且つ一層に大なるものと謂ふべく、やがてこれ、花に對して一層の愛と敬とを致せるものと謂ふべし。シエレーの主旨蓋こゝにあるべく、余の翻譯の精神亦此にあり。

明治四十年八月十三日

東京淀橋柏木にて 木村鷹太郎識

含羞草目次

序

緒言

シエレー及び其詩

『含羞草』

『含羞草』とブラトーンの哲學

翻譯に就いて

本文

第一部 (二十八節)

— 1 —
— 三三 —
— 一五 —
— 二 —
— 1 —

第二部 (十五節)

第三部 (二十九節)

結論 (六節)

註釋

三〇
四七
七六
(卷末)

挿畫

(表紙)『來ん世を夢む胡蝶をば』

(扉畫)『御園の中に含羞草一本生えぬ』

(口繪)シエレー肖像及び手蹟

(一)『堇の花も咲き出でぬ』

一
二

(二)『ナヤス女神かみ鈴蘭』

(三)『薔薇の花は湯あみすと、ニシフ女神が』(フラックス

マン意匠)

(四)『丈も直なる百合の花』

(五)『睡蓮浮葉ゆれ動き』

(六)『色も香も無けど其愛「愛」のごと』

(七)『千種の花の星光』

(八)夜(トールワルドセン彫刻)

(九)『ナイチンゲールの聲のみは』

(十)『女の内のすぐれたる、手弱女一人』

- (十一)朝(トールワールドセン彫刻)
(十二)日に萎へたる草木には、涼しき流汲み來り』
(十三)『草木害ふ飛ぶ虫も』
(十四)『蜜蜂或は雷の如く飛び交ふ蜉蝣や』
(十五)『枯れたる木の葉赤に茶に』
(十六)『流に咲ける水草の』
(十七)『菌や微は霧のごと』
(十八)『残れる莖は突き立ちて、刑の柱―罪人の』
(十九)『愛』と心(トールワールドセン彫刻)

緒言

木村鷹太郎

シェレー及び其詩

富有なる従男爵家の子にして、其美天使の如く、寛大、溫和、鄭重、能く義氣に富み、其蒲柳の質は常に理想の美を追求し、理想と謂はんよりも寧ろ身を夢想の郷に置き、實際の世界を以つて虚欺、紛争、無知の世界となせるは、實にシェレーの人物及び其詩なるかな。

パーシー・ピット・シェレー（千七百九十二年サセックスのフイルド・ブレースに生る。十五歳にしてイートン小學に學び、十八歳の時オックスフォード大學に入る。其虚偽と不眞理とを惡むや、耶蘇教の如きは、其大に嫌ふ所にして、在校中『無神論』を出版して、爲めに、居ること僅かに半歳餘にして、大學を放逐されたり。

其未だ大學に入らざるの前、十八歳の時、深く從妹グローブ嬢に戀ひしと雖、事なくして終り、後大學を放逐さるゝや、父は怒りてシェレーを勘當し、生活費用は姉の少貯蓄中より、シェレーの學校朋友たる、ハリエツ

ト・ウエストブルークなる一女子の手を経て送られ居たるが、こゝに不良なる關係を生じ、シェレーはハリエツトと結婚せり。ハリエツトは美人なりと雖素性は卑しき者なりしより、父其結婚を承認せざりき。これより兩人諸所に轉々移住す。されどもシェレー内心此女を愛せざるより、兩人遂に別居し、こゝにシェレーは、再び色才共に秀絶せるメリーラルスタンクラフト・ゴッドキンに戀着し、此女子と結婚することゝなれり。女子時に年甫めて十六。

然りと雖シェレーは自由戀愛主義の人にして婚禮の如

きは其好まざる所。而して是等の關係は、皆正式のものに非ずして、たゞこれ野合に外ならざりき。前にハリエットと離別せし時、此女已に懐胎し居たり。故にシェレー此後スコットランドに至りて始めて結婚の儀式を舉行し、懐胎兒の自己の子なることを承認せり。されども此の時シェレーは既に、ハリエットに對して愛情あるなく、一方メリーとは密着離る可からざる戀愛の仲なりしなり。之れを以つて、始めて婚禮を行ひたる一對は、直に別れて永久の別離となり、新愛情のシェレーとメリーとは、早くも已に大陸旅行の途上にありき。

此前妻離別と、新婚旅行とは一千八百十四年五月にして、其れより、シェレーは詩人的生活を爲し始め、これより其詩續々として出で、又た數子生れたり。(其第三子の生れたるは、一千八百十九年イタリアのフィレンツェに居るの時なり。)

後又た暫時英國に歸りしが、時に前妻ハリエット種々不幸の境遇に陥り、煩悶懊惱、遂に自殺を遂げたり。此事痛くシェレーの心情に激動を與へ、其感動や終生消滅せざりしなり。シェレー、健康上、醫師の勸告に由り、メリー、及び二子、及び従妹等と共に英國を後にして、

イタリアに向つて出發す。これ一千八百十八年三月なり。

其スキツルに在る時、バイロンと相識り、後イタリアに到りて、バイロンとの交情益々親密を加ふ。シェレー、イタリアに到りローマに住す。是時よりシェレーの詩想愈々豊富にして、その作益々多し。シェレー舟遊を好むと雖水泳を知らず。一日リブルノより小船に乗りて歸らんとするや、途にスベッチア灣に颶風に逢ひ、船覆没して、シェレーの行衛知れざりしが、數日の後屍體岸邊に打上がりしかば、バイロン土地の法律に遵ひ、

之れを火葬し、厚く之れをローマの新教の墓地に葬れり。これ一千八百二十二年七月にして、シェレー享年二十九なり。

シェレーの人物たるや、實に空想夢幻的にして、一種の社會人生觀を有し、世界を以つて虚欺、無知、偽善、紛争のみとなし、其自己の主義に對する熱烈なる同情は、彼れの理性を掩蔽し、思想爲めに極端に馳せ、現在の社會制度を破壊せば、こゝに自然に黄金時代の道義と幸福とは生ずるものと思惟せり。然るに其詩人としてのシェレーたるや、至高なる天才を有し、想像豊富

にして熱性燃ゆるが如く、其詩の音調の美に至つては、
英國詩人中、一人としてシェリーの右に出づるものなし。
“Queen Mab” “Alastor” “The Revolt of Islam” “Hellas” “The Witch of
Atlas” “Prometheus Unbound” “Cenci” “Rosarind and Helen” “Adonais”
“The Sensitive Plant” “Ode to Skylark” “The Cloud” 等は其有名
なるものにして、叙事、叙景、叙情一として美を極め
ざるなしと雖、其缺點たるや往々にして意味の明瞭を
缺き、時には全く解すべからざるものあることゝなす。
シェリーの詩其れ美なり。然りと雖詩中の人物及び事
變等は、決して現實世界のものに非ずして、夢想界、

現象界の夫れたるなり。是れを以て、シェリーの詩には
人間世界の生活法行はるゝなく、吾人は全くシェリーの
世界に住し、天と地との中間—抽象、夢境、表象界に
在るものゝ如く、萬物皆な種々の形狀を呈して雲に浮
び、雪白、金色、變化常なき如きに比ふべし。
シェリーの詩、シェリーの人物それ此くの如し。此くの
如きの人に在つては、自然は其最大なる慰安にして、
或は森林、或は海邊、或は莊大なる山水等は、其最大
なる幸福となす所なり。或は岩、或は雲、或は牧場等は、
常人に在つては殆ど何物にてもあらずと雖、シェリーに

在つては是等は實に生命を有し、彼に同情を寄するの思ありて、人間に對するよりも寧ろ愉快に感せらるゝなり―如何なる處女の微笑と雖、東雲明けそむる風致の美に及ぶことなく、如何なる歡喜と雖、水天髣髴として際涯なき大海に、怒濤逆か卷く如き、勝利の感覺あることなし。或は雲漢、或は草木、或は朝暎等は、シェレ―詩中の人物たるなり。『含羞草』一もと生ゆる花園の詩に就ても之れを觀よ。含羞草の夢想せる所は、實にこれシェレ―の心情にして、シェレ―は此美しき園中に、含羞草となりて「愛」と「美」とを觀じつゝあるなり。

『含羞草』

『含羞草』は一千八百二十年の冬、シェレ―のイタリア、ピサに住居せしときの作にして、夫人メリーが、種々の花を客室に集め居りて、色彩互に相映じ、香氣馥郁たりしより、此詩を書かんと想ひ起こしゝものなりと云ふ。

含羞草は、シェレ―の國語にては之れを Sensitive Plant と謂ひ、漢語之れを含羞草と謂ひ、和名之れを「ねむりぐさ」、「くさねむり」又は「おじぎそう」と謂ふ。今

若し英語 Sensitive Plant と言はば其感情性の花なるを表はして之れを意譯せば、或は「有情の花」と云ふを得べく、最も興味ある名稱なりと雖、「ねむりぐさ」或は「おじきそう」に至つては、多少感覺性のものなるを表はさるるに非ずと雖、有情の花の如き趣味は之れを缺損せるなり。漢名「含羞草」は、甚だ詩的の意味を有し、少女羞を含むの態を表はし、寧ろ英國名よりも趣味多きが如し。されども吾れには和名あり、又た妄に變更すること能はず、和名に従つてこゝに之れを「ねむりぐさ」と呼ばん。

されども此く詩人に歌はれ、シエー作中の傑作中に數へらるゝ詩中の此花は果して如何なるものぞ。あゝ何等言ふべきことなし、

『そは含羞草其身には
華麗なる花も色も香
無けど……………』

たゞ

『されども葉より根幹まで
感せし愛の小さき實を
與ふるのみ』

なり。然りと雖、此色も香もなき「ねむりぐさ」はシェ
レーの此詩の主人公にして、彼れの美しき園に一もと
生ゆるなり。シェレーの心情は、美もなく色も香もなき
この草花となりて、果して此園に何をか夢想せる。こ
こに種々の花の美を樂しみ、春夏秋冬の推移を觀じ、
以つて宇宙間理性の作用と秩序との關係を明らめ、美
と愛との哲學に達するなり。而して之れプラトーンの
「觀念」論と「愛」と「美」との哲理たるなり。

『含羞草』とプラトーンの哲學

然り、シェレーは最もプラトーンを愛讀し、又大に其
感化を受けたる人なり。ロック、ヒューム等は、シェレーの
早くより讀みし所にして、其思想の本源に溯らんと欲
せば、是非ともプラトーンにまで至らざるを得ざるな
り。而して一千八百十八年の夏プラトーンの有名なる
『宴會篇』を英譯したり。デオゲネースラエルチオス(Diogenes
Laertios)のプラトーン傳は又たシェレーの愛讀せる
所(余の譯せる『プラトーン全集』第一卷のプラトーン

傳は専らデオゲテース・ラエル・チオスのプラトーン傳に據りしものにして、其開卷の白紙に自筆もて『再三反復閲讀』したる由を記るしたり。シエレー夫人の言に據れば『シエレーの知性上の欲求は極端なるまでに深切となれり』と云ふ。意ふにシエレーの精神は、此書に由りて古昔の莊麗なる花園に遊び居りしもの、如く、每葉種々の書き入れを爲し、讀むに従つて詩想湧出したるもの、如し。或は幽邃なる丘上の橄欖の樹蔭に、或は其好む所の舟遊の波上に、常に此書を携帯し、殆ど手より離すことなく、數年の間は、此書と共に生活し

たるや歷々徴すべきなり。シエレーが此プラトーン傳を愛讀せるの、久しき以前よりの事なるは、其英國に在りて最も財政の窮迫して、身を執達吏より隱蔽せざるを得ざる時（一千八百十四年）愛妻メリーより、夫に宛てし書翰に由りても之を知るべし、一曰く『郎は五時頃コヒー店の門前に到り給はずや。されども此る場所に入らざるは不愉快の事なるべければ、妾は正確其時刻に同所に到り、連れ立ちて聖ポール寺に到らん。君は書物無かる可ければ、「デオゲテース」を送るなり』と。

シェレー此くも『デオゲネース』を愛讀し、遂にプラ
トーンが、愛人アステルなる者の死を哀悼せる短歌は、
シェレーの眼に映じたり。シェレー之れを英譯して、親友
レイ・ハントの哀悼詩 Adonais の序言となす。其英譯次の
如し。

“Thou wert the morning star among the living,

Ere thy fair light had fled; —

Now, having died, thou art as Hesperus, giving

New splendor to the dead.”

此くデオゲネースのプラトーン傳を愛讀し、又たプラ

トーンの著書を英譯したるシェレー——其感化は殆其詩中
に瀰漫して、殊に“Hymn to the intellectual beauty” “Epipsy-
chidion” 等には顯然として之れを觀るべく、『含羞草』の
如きも、特にプラトーンの「愛」と「美」との哲理を歌
へるものと謂ふべきなり。故に善くシェレーを解せんと
欲するものは、先づ十分プラトーンを解せざる可らざ
るなり。

シェレーの英譯したる所のプラトーンの『宴會』篇は
愛の神の讚美演説たるなり。其内エリキシマッホスなる
ものゝ演説には、愛を以つて一切善美の根源なりとし、

天體の運行も、四時の順和も、人體の健康も、音樂の美も、皆盡く愛の原理の作用より來るとなし、一種、愛の凡神論的の言を爲せり。シエレーの

『此美しき御園生に』

「春」生れ出で、げに「愛」の

御魂の如く、隈もなく

いたり及べば………」

と言へるは、これ愛の凡神に代ふるに「春」の名稱を以つてせしものたるなり。

『含羞草』の園生には、種々の花は美しく咲き笑め

り。

『されども葉より根幹まで

感せし愛の小さき實を

與ふるのみの含羞草—

凡てにまさり受くれども、

只愛のみに事缺ける

其等に愛を與ふなり—

『それは含羞草其身には
華麗なる花も色も香も

無けど、其愛——「愛」のこど——
胸の深きに充ち溢れ
己の持たぬ「美」をこそは
我身に得んと願へばぞ。」

とは『宴會』篇のソークラテースの演説中ヂオチマなる婦人の哲理談に、『愛』の兩親及び誕生を謂へると、全然同一精神たるなり。——其ヂオチマの談話に據れば、『愛』の父は豊富の神なりと雖、母は貧乏の神にて、其子たる「愛」は時に貧、時に富、其容貌や粗剛にして汚穢に染み、歩むに靴なく住するに家なく、其寝ぬる

や青天の下に地上に横はり、或は人の門戸に息ひ、其母の如く常に不幸の境遇にありき。然りと雖も亦幾分は父に似たる所ありて、常に美と善とに對して野心を抱懐せり。「愛」は決して美なるものに非ず。其之れを美なりと思ふに至りしは、愛するものと、愛さるゝ者との混同に原因し、愛を以つて美なりと思ふに至りしなり。かの愛さるゝものは美にして艶なりと雖、愛は全く別物たりとなす。而してシェーの含羞草は『華麗なる花も色も香も、無けど其の愛小「愛」のこど』『己の持たぬ美をこそは、其の身に得んと願へばぞ』となす。

之れ豈プラトーンの「愛」の説明を歌ひしものに非ずとせんや。愛とは美の愛にして、含羞草は何物をも持てるなく、園中の美を愛し、たゞ「愛のみのみのみをみとみるのみ』にして、受くるは『凡にまさり』多く受くるなり。シレー『含羞草』の神髓實にこゝにあり。

プラトーンの世界創造説に據る時は、神は、無秩序を以つて美ならず、秩序には靈魂及び靈知無かる可からずとなし、靈魂内に靈智を置き、之れを物體中に置きて最善最美の事業の創造者となせりとなす（『チマイオス』篇）シレー素より無神論者なりと雖、混沌たる

物質に對する靈智なる原理ありとは其信する所にして、此含羞草の花園にも、一個の秩序原理の「力」を置き、以つて其美を維持せしめたり。乃ち—

『いといと樂もしかる此園に

—つの力ちからうしはきて、

エデンの園のエヴのごと、

花は目さむも夢みるも、

星の御空みそらの神のごと

そを治むなる美の女神—』

と。天體秩序整然たる、これ秩序原理の統治あればな

り。エデンの園、エヴ之れを守りて美を扶植し、醜を
芟除し、美益々美なり。含羞草の園また、之れをつか
さどる一個の力ありて其美を維持す。之れ此園の女神
にして、『朝より夕に至るまで、園を見まもり』愛でつ
つ、日に萎へたる草木には、涼しき流汲み來り、澄み
たる水を注ぎ、夕立の雨重ければ、花の杯より充ちた
る水をこぼし、或は其やさしき手は竿と柳の糸をもて、
花も莖をも支へなどし、害虫は之れを遠ざけ、雜草は
之れを除き居たりしなり。此の統治原理ありて、始め
て此花園の美は有りき。然るに一旦此原理去るや美な

る此花園も忽ち其美を失して、荒寥凄愴を極むるに至
るとなす。又た之れプラトンの哲理を其内に含めし
もの、如し。
此園此く荒れずさび、美も亦消滅して其影をだに止
めざるに至れり。然りと雖美は果して枯るゝものなる
か、愛は果して朽つるものなるか。プラトンの哲學
に在つては、物の美なるは、色彩、形状等、其原因を
爲せるに非ずして、宇宙間絶對的美の觀念なるものあ
りて、其觀念諸物に現はれて美となるなり。〔理想國〕
五卷、『フアイドーン』篇其他。故に美の本體たる「觀念」

と、美たるべき「諸物」とは別物なり。物は變化枯朽す。雖、美は不朽、不變なりとなす。プラトーン又た愛は不死なりとなす、其理由如何ん。(一) 男女間の愛は子孫を生じて形體的な不死を傳へ。(二) 大事業大感化及び(三) 名譽等は此種の精神的な不死を與ふ。これ皆愛の爲す所にし愛の不死たる理由となす。然りと雖此くの如きは愛の哲理の初學たるのみ。(四) 眞正奧妙の愛は『絶對美』の追求にして、此に始めて高尚なる不死を得るとなす。即ち美は一にして、諸物の美なるは、此美を享有せるに由るものなるを以つて、人若し此大

美に達せんと欲せば、人體美より精神美に進み、制度法律の美に及び、尙ほ又た進みて學術智識の美に至り、愈々美の觀念を擴大し、遂に絶對美の域に達し、美に合體して、愛を全うし、以つて不死たるにありとなす。(『宴會』篇)。此くて美は不死なり、美と合體せる愛亦不死なり、喜悅豈不死ならざらんや。これプラトーンの哲理にして、シェレーに在つては

『此美しき御園生も

此美しき手弱女も

凡ての美なる色も香も

實、消えしに非ずして……

「これ「美」と「愛」と「喜」は

死なく變化も亦あらず」

との詩となり、以つて含羞草の結論となれるなり。
夫れ然り。此詩の精神の奥にはプラトンの形而上
學あり。是れ此詩の大精神なるが如し。然りと雖吾人
は又た、普通の人事を以つて此詩を解釋すべき意味な
しと云ふ可からざるなり。即ち含羞草は愛にして愛人
或は情夫を表はし、「園の美人は」情婦或は、貞操なる

妻を表はし、種々の花は情婦（或は妻）が夫（ねむり
ぐさ）に對して貞操を盡くし、一家を整理し、孜孜と
して善美を得るに力めて、幸福を持來さんとせし結果
を表はし、秋冬の情態は賢婦人の死去を表はすものと
見るも不可なきが如し。
今若し前來此詩に表はるゝ所の、凡の意味を總合し
て、之れを圖にして表はさば――

含羞草
愛情郎
夫

園の美人

種々の花

秋冬の情

宇宙

(道)

情

真

美

理

秩

幸

混

亂

靈

(理)

婦

妻

想

序

福

沌

雜

醜

惡

此くの如きなるべし。今又た之れに説明を重ねんか、
 曰く—始めに混沌ありき、之れに精靈(道理)作用し
 て調和と秩序とを得て美を生じ、美に對して愛あり、
 —愛と精靈(道理)と合體してこゝに美を樂しむを得
 —道理秩序去りて、こゝに亂雜醜惡ありと言ふべきな
 り。

神秘家スエデンボルグの結婚論に據れば、結婚とは
 『汝は我と同一の眞理を觀たりや』『然り』と言ふにあ
 りと。含羞草と園の美人との愛情關係は、共に同一眞

理として美を觀たりしなり。今若しプラトーンの哲學に加ふるに、神秘論を以つて、此詩の解釋を補はば、又た一光明を添ふるに足らんか。

翻譯に就いて

餘の此詩を翻譯するや、決して世間の文士先生の如く、種々有り難みを並べ、種々勿體を付けて翻譯を誇らんとの意志毫もだに之れなきは言を要せざるなり。シエレーの言辭の美麗なる、其形容詞の豊富なる、其音調の整和なる、英國詩人中稀となす所にして、余の如

き詞華文藻に貧なる者の、到底翻譯を試み得べきに非ざるべし。然りと雖世間専門の詩人文士などの作物を觀るに、必しも絶妙なるものゝみに限れるに非ず（否、彼等の言辭必ずしも美あるなく、其美ある如き觀あるものと雖、多くは言語のみに苦心して、何等内容思想あるなく、何等高尙なる感情思想の見るに足るものなく、徒らに意味晦澁にして、彼等何事を歌へるか、吾人殆ど解する能はず、或は神秘を擬して自己の無教育と、思想の不透明とを隱蔽し、或は死語難解の語を探り出して之れを用ゐ、以つて自ら喜び、或は多く漢字

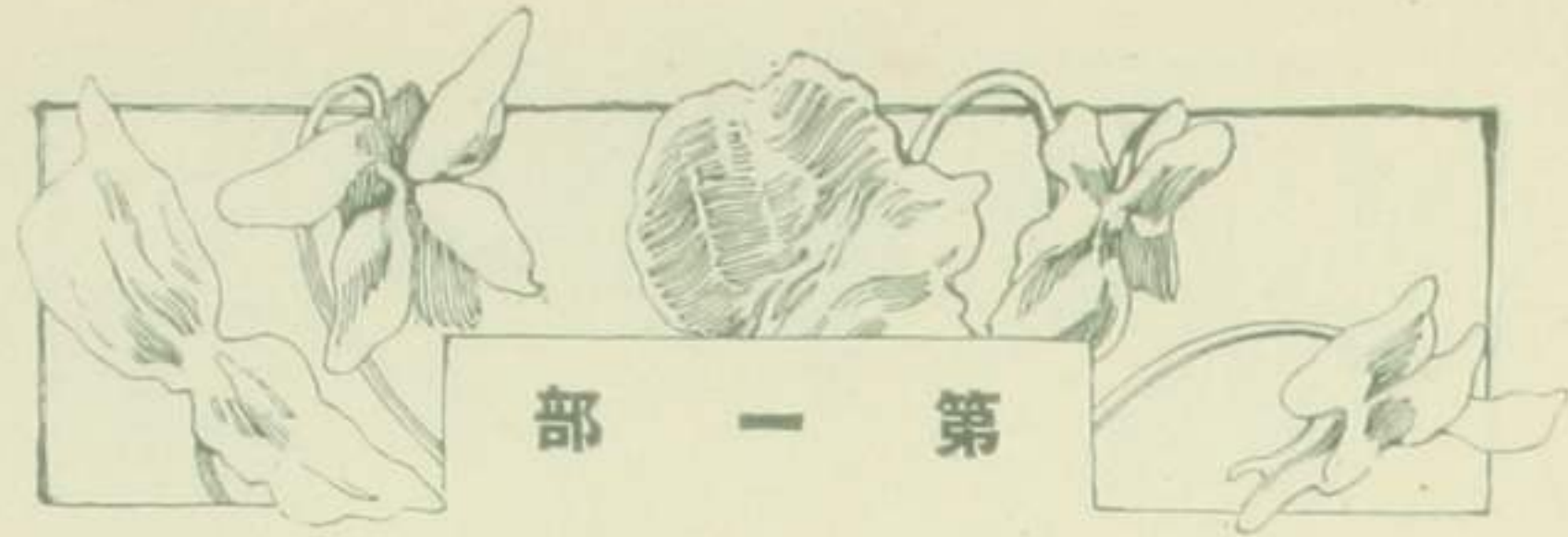
を交へ、吳音に讀ませ、或は漢字に附するに無理のふり假名を以つてして新語を作れりと心得るなり。是故に吾人の如き門外漢と雖、敢て謙遜卑下するの要なく、大膽に「ヤッテノケ」て可なりとの感を生じ、こゝにシェレの翻譯を試む。

元來シェレの詩は、英國詩人中、其の最も難解のものにして、時には殆ど不可解のものありとは、天下の定説なり。解釋己に困難にして、翻譯の困難は又た一層なるは、シェレの原詩を讀みし者の諒知する所なるべし。たゞ余がシェレの此詩を譯するの動機たるや、

余、性花を愛し、シェレの此花園の詩を愛し、此詩を讀みて大に愉快を感じ、此愉快は、又た之れを、直に原詩に就いて讀み得ざる同好の士に分ち、又た花を愛する人々と共に楽しまんとの微意に出でしのみ。故に此翻譯たるや、作者或は譯者の位置より爲せしに非ずして、自ら「愛吟家」、「讀書家」として試みしに過ぎず。素より一語一字も苟もすることなく、完全なる翻譯を旨としたりと雖、限られたる行數間に、一定の字數を以つてしては、何人も能くすべからざることとは、言を要せず。シェレの原詩一節は、十綴音の四行より成れ

りと雖、余は之れを七五調六行となし、而も尙ほ此六行中に、十分原詩四行中の言語及び意味を含蓄せしめ得ざりしものあることを告白し、只だ面影なりとも之れを寫し、原詩を原語もて讀み得ざる人々に、幾分の便利となるを得ば幸なりとなす。批評は喜びて之れを受けん。若し餘りにシエレーの詞藻を缺如し、或は其神を寫し得ざるものありとせば、シエレーの翻譯に非ずして、木村一個の自作なりと稱さるゝとも余の厭ふ所に非ず—余の標準とせる所は、『無きにまされり』と云ふにあればなり。只だ幸なるは、宮本武林堂氏が、善良

美麗にして、高尚なる慰安を與ふるの書を作るに於ては、出版費用の如きは惜むことなしとの非常なる好意を與へられたることゝなす。



含羞草

御園の内に含羞草

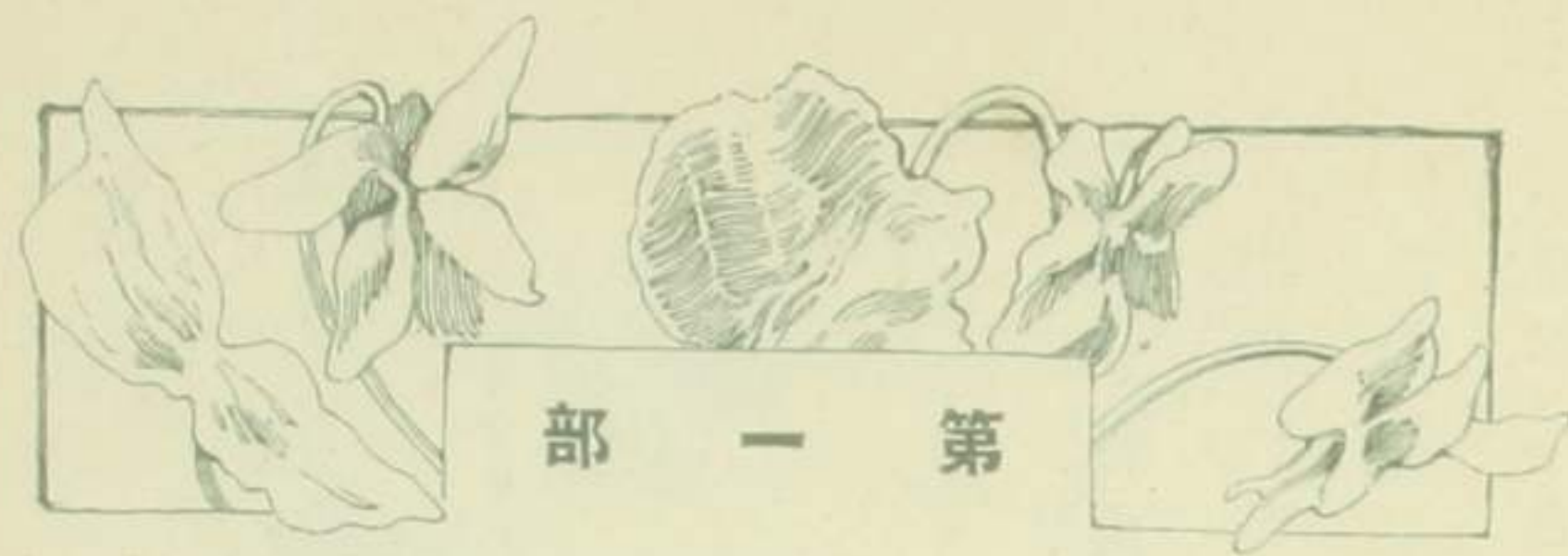
一もと生えぬ。うら若き

風、白銀の露をもて

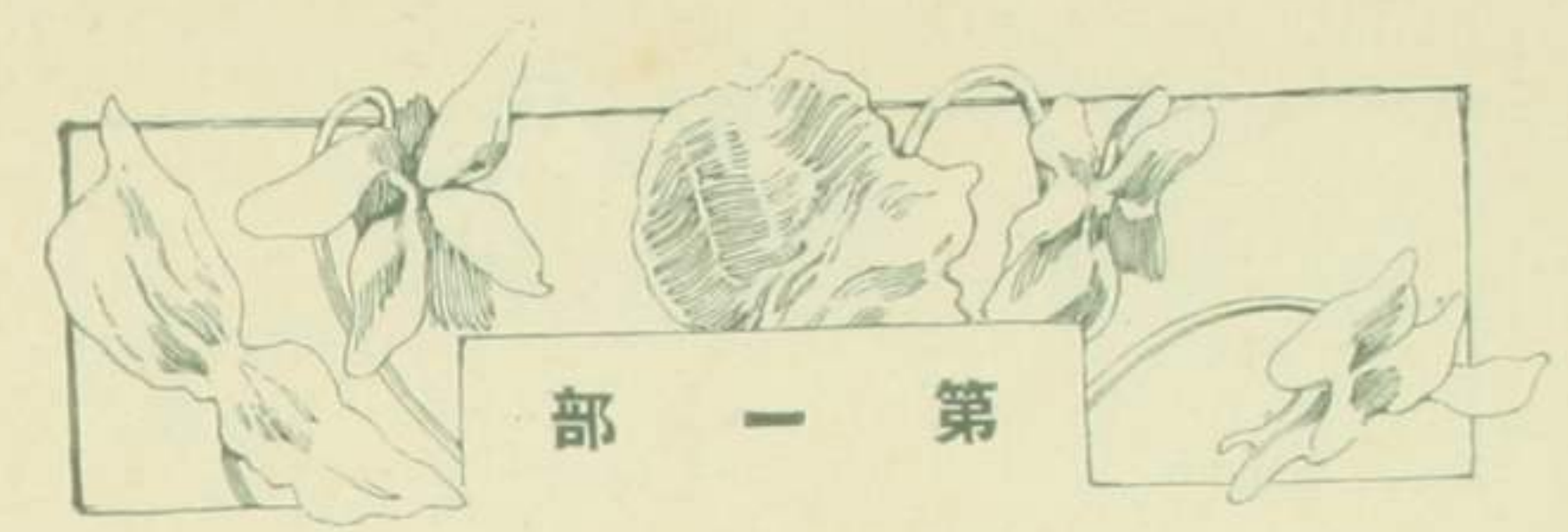
其をはこくめば、扇なす

其葉を晝はひろげつゝ、

夜の接吻に閉すなり。



部 一 第



部 一 第

二

此美しき御園生に

「春」生れ出で、げに「愛」の

精靈の如く、隈もなく

いたり及べば、花も葉も

冬のねむりの夢さまし、

おぐらき土地に萌え出でぬ。

三

されども原に野に園に—

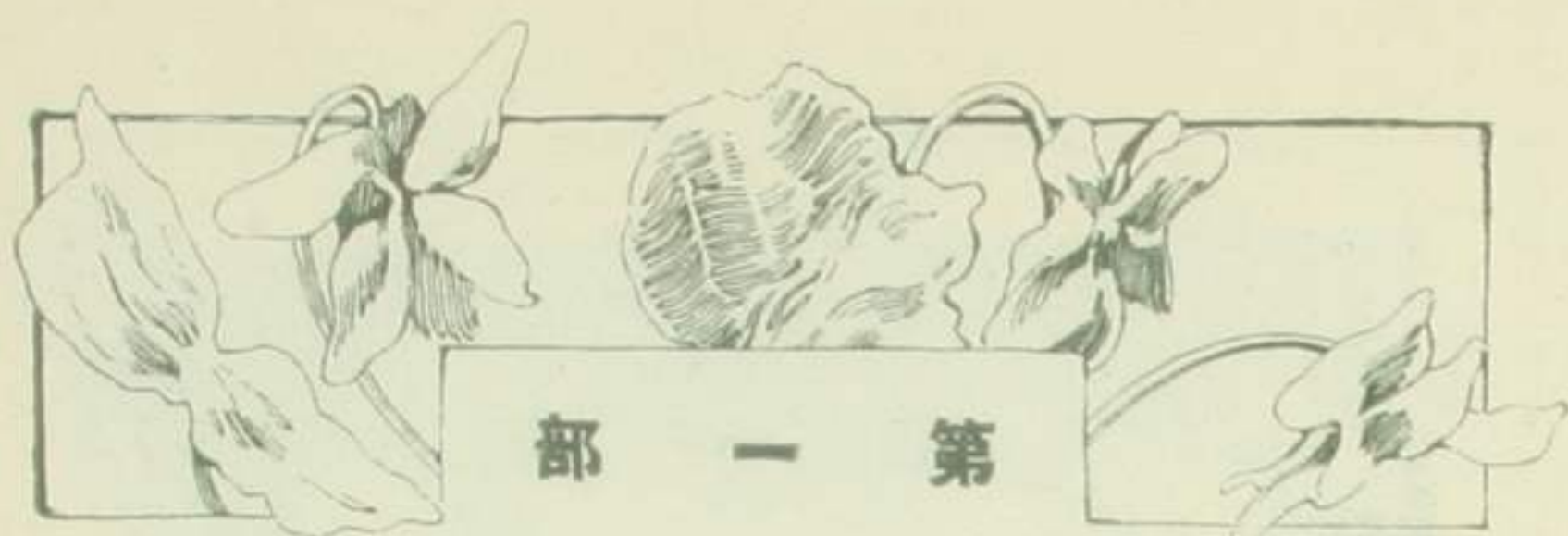
眞晝樂しき思ある

牝鹿の戀の其如く—

己が幸に胸おどり

身をふるはすは只ひとり、

友もあらざる含羞草。

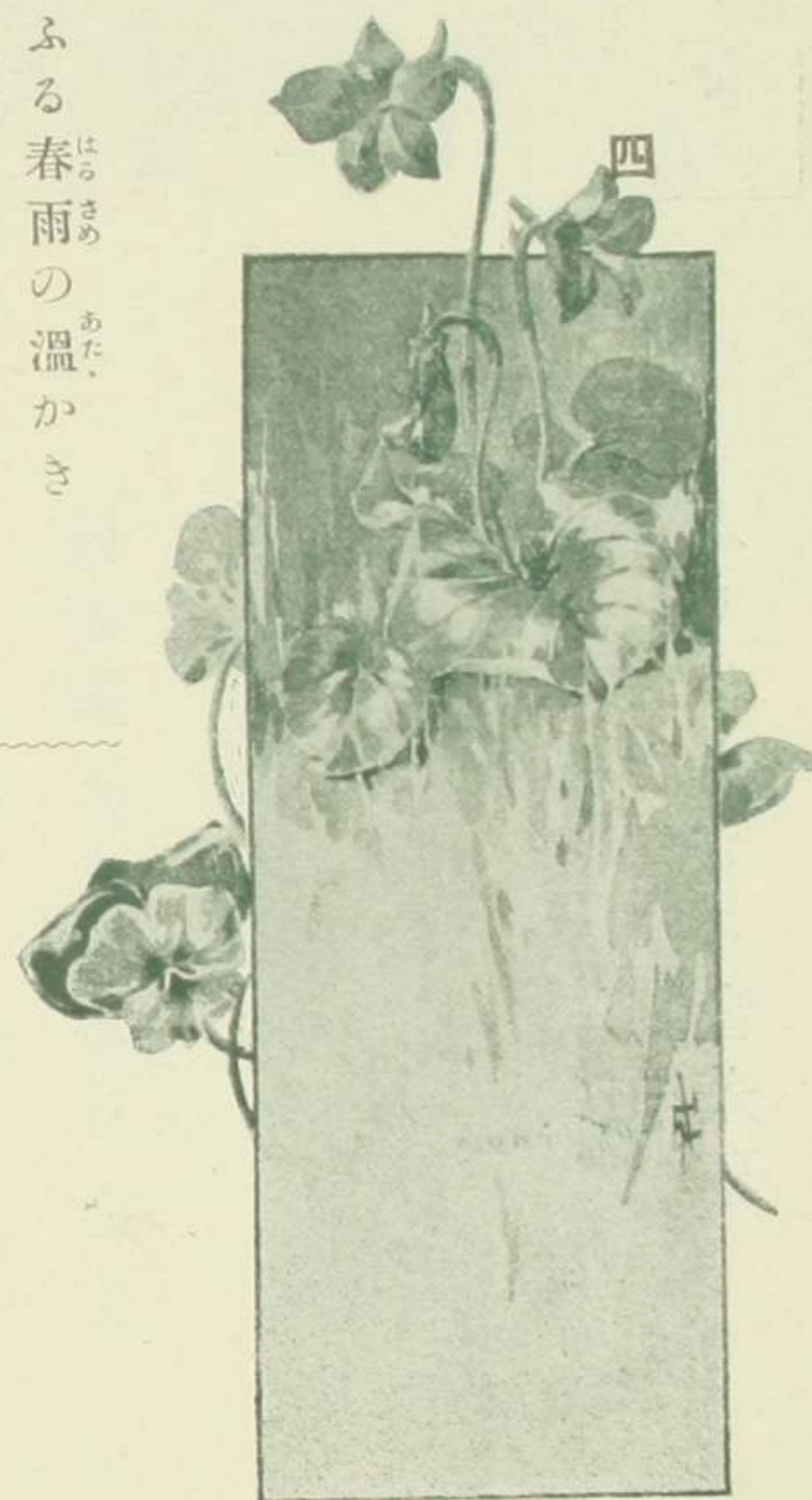


部 一 第

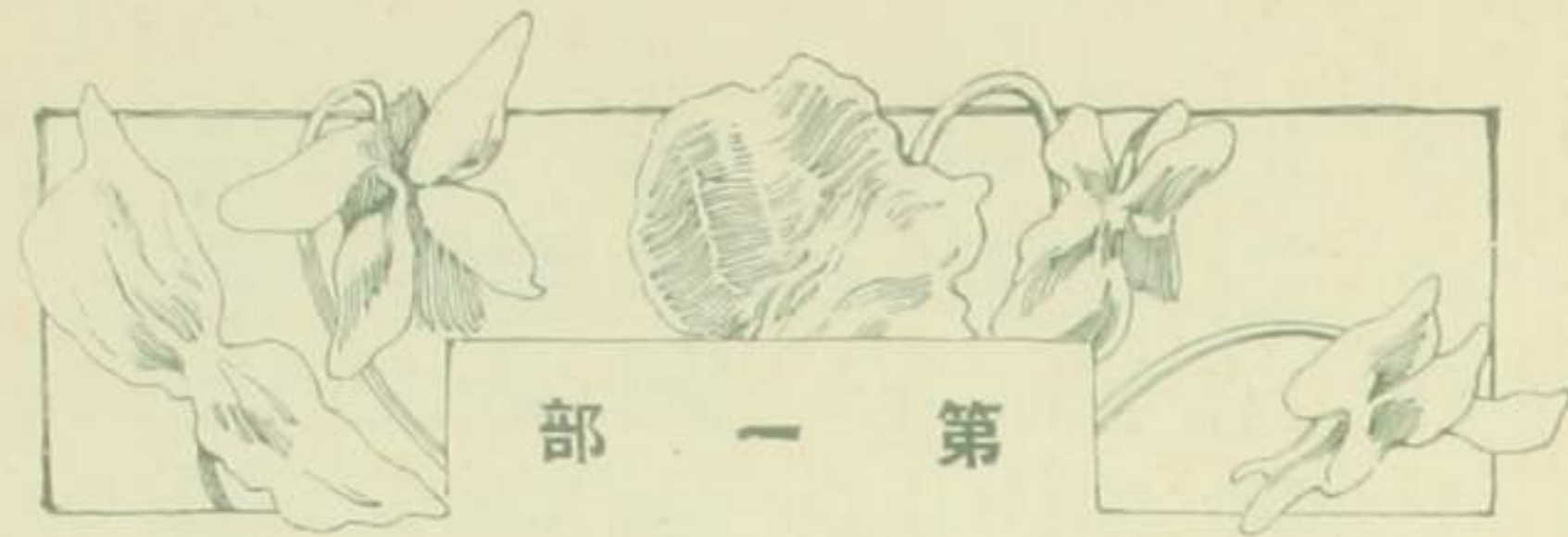
斑色どる白頭翁、
 丈いと高き「チューリップ」、
 一ときは目だつ水仙は
 流の隈に影うつし
 己が姿にほれぐと
 死に至るまで見とれつゝ。

五

ふる春雨の温かき
 湿受けて「まつゆきそう」
 菫の花も咲き出でぬ。
 息にはきよき薰充ち



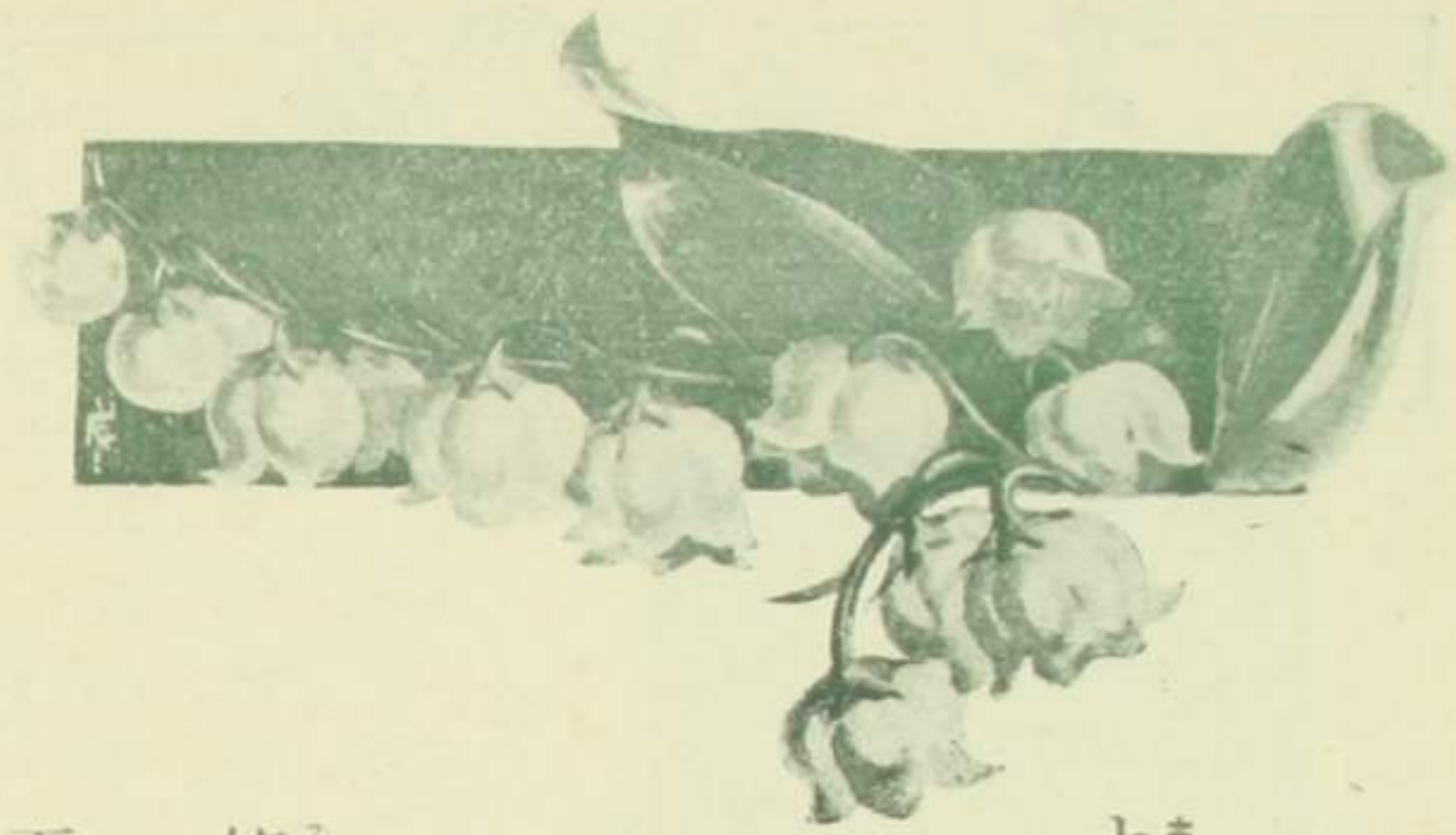
歌音曲の如くにて
 空にのぼれり芝生より。



部 一 第

白しろに紫むらさき又また青あをに
 色いろ様さま々々の風かぜ信しん子こ
 花はなの鈴すずより今いまさららに
 ゆかしたのしき情じやう深ふかき
 樂がくのひゞきを振ふり出いだし
 薰かほるが如ごとく思おもはるゝ。

七



ナヤス女神めがみか、み鈴蘭すずらん—
 うら若草わかぐさの美うつくしく、
 青あをさめ白しろき其その色いろは
 胸むねに思おものあればにて、
 緑みどりゆかしき葉は蔭かげより、
 震ふるへる鈴すずの光ひかり見みゆ。

六

薔薇の花は湯あみすと、
ニ*ンフ女神が

燃ゆるなる
深き御胸をひ

一*重く〜に衣



其美と愛の御魂をば
つかれし空氣に示めすこと。

丈も直なる百

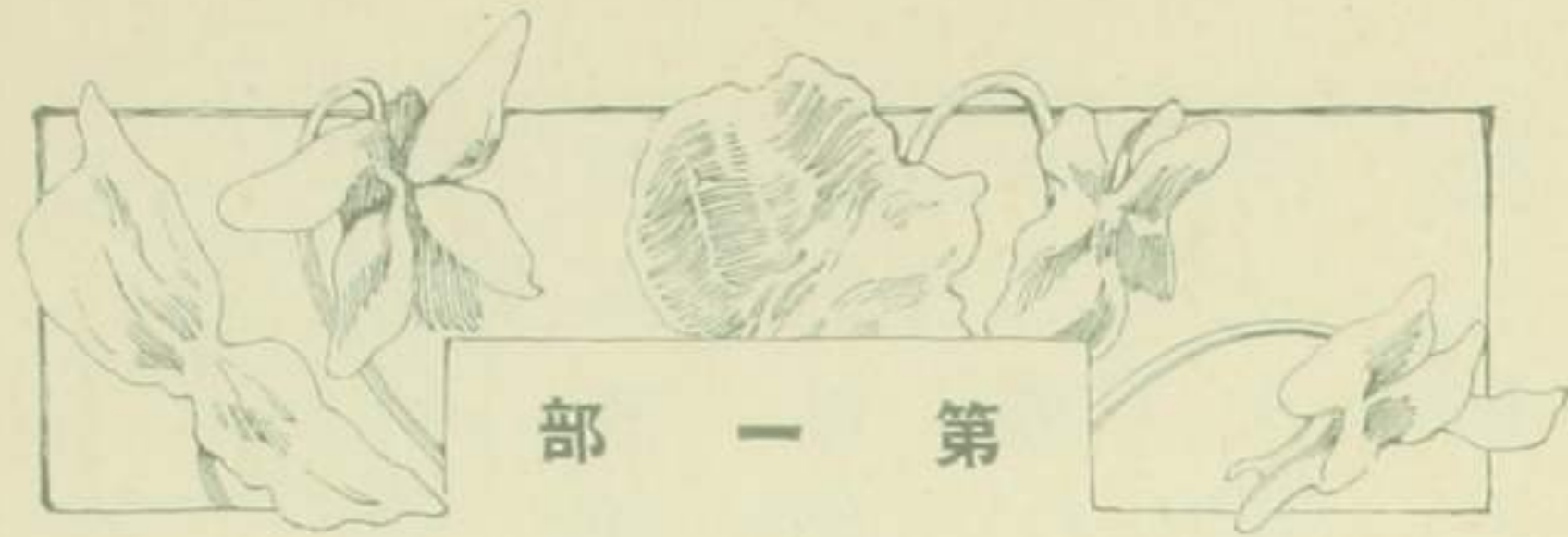
月の色なす杯

マ*イナスの如

赤き星なすそれが眼は

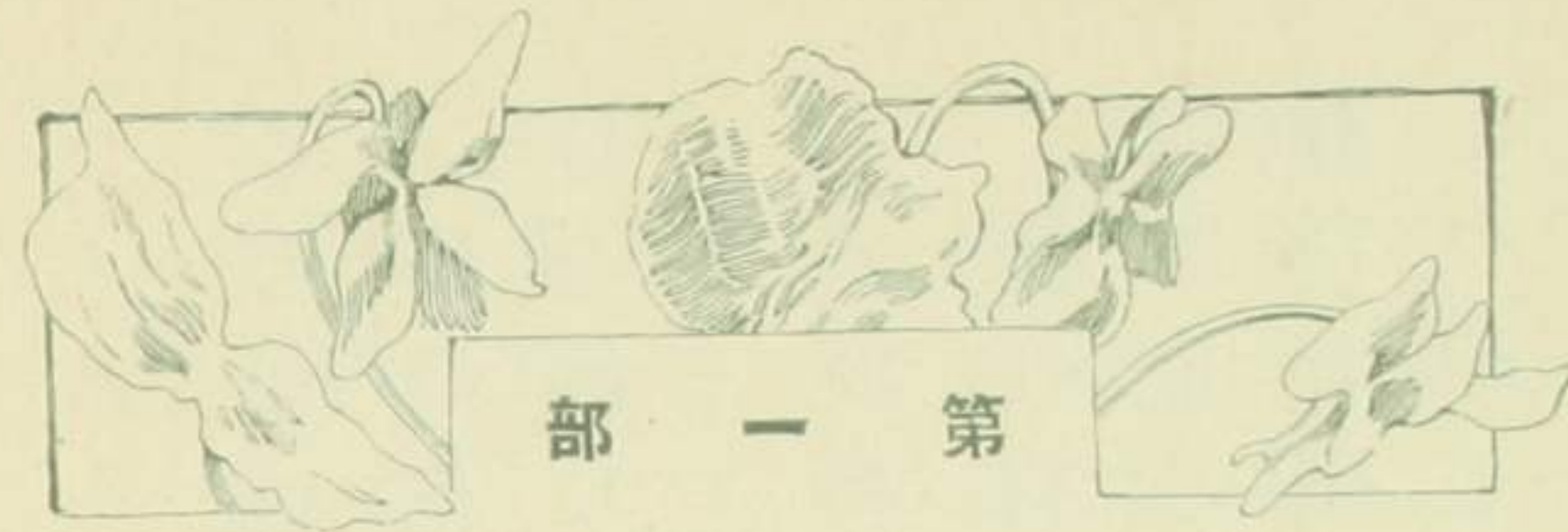
澄たる露を透きとほし、
なつかしき空ながむなり。





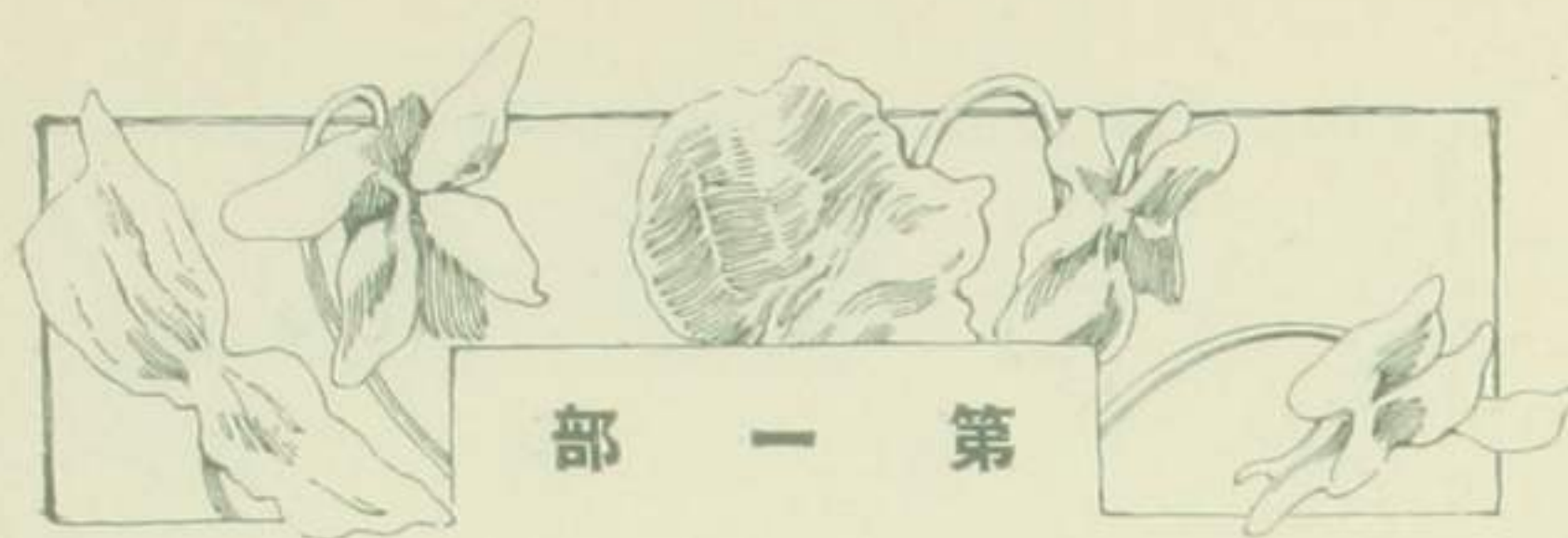
屋根爲す花の枝の下、
 胸定まらぬ水の面は—
 もつれからまり様々に
 色どる天を透し來る
 黄金の光又た緑、
 飾りなしけり華やかに。

十一



茉莉花—姿なよやかに、
 其香凡のものならぬ
 「なつするせん」の美しき—
 風土異なる國々の
 稀なる花も此園に
 何れもまたたく育ちけり。

十



部 一 第

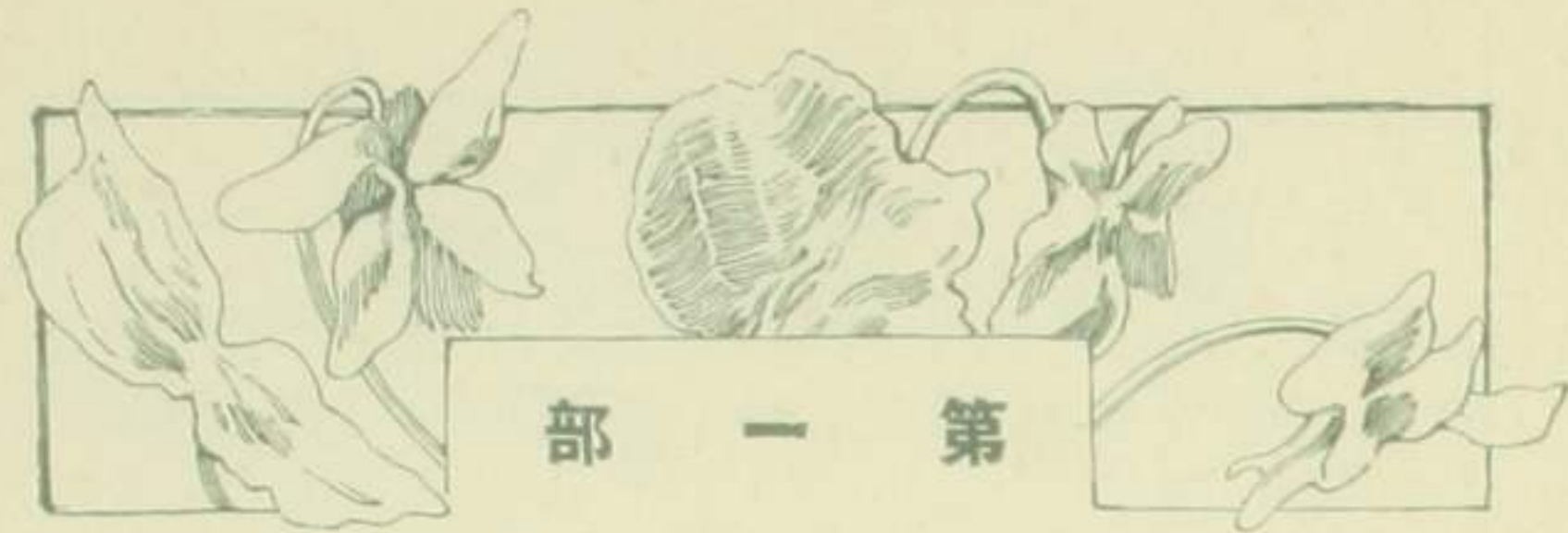
芝生と苔の曲り道
 み園に沿ひつ横ぎりつ、
 或は日を受けそよ風に
 吹かるゝあれば、或はまた
 花さく木々の園亭の
 下に隠るゝものもあり。

十三

睡蓮浮葉ゆれ動き、
 星なす蕾きらめきぬ。
 其をば環りて静やかに
 水おもむろに流れつゝ、
 清けき音と光との
 動を爲して踊りつゝ。

十二

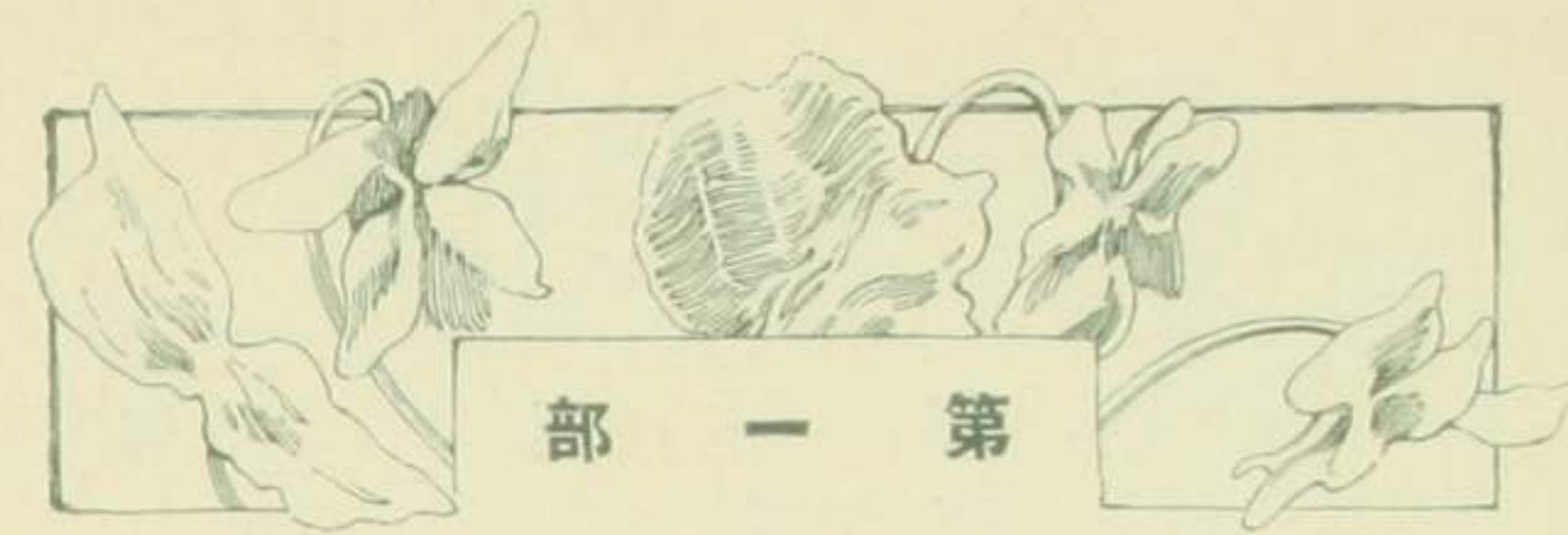




部一第

此このけがれなき御園みそのより
 もろくの花はな、嬰兒あさなごの
 目めさめて母ははにうち笑わらみつ、
 母ははの樂たのしき其歌そのうたは
 始はじめめ寢ねむらせ得うるなるも
 後のちは目めさますもの、こと

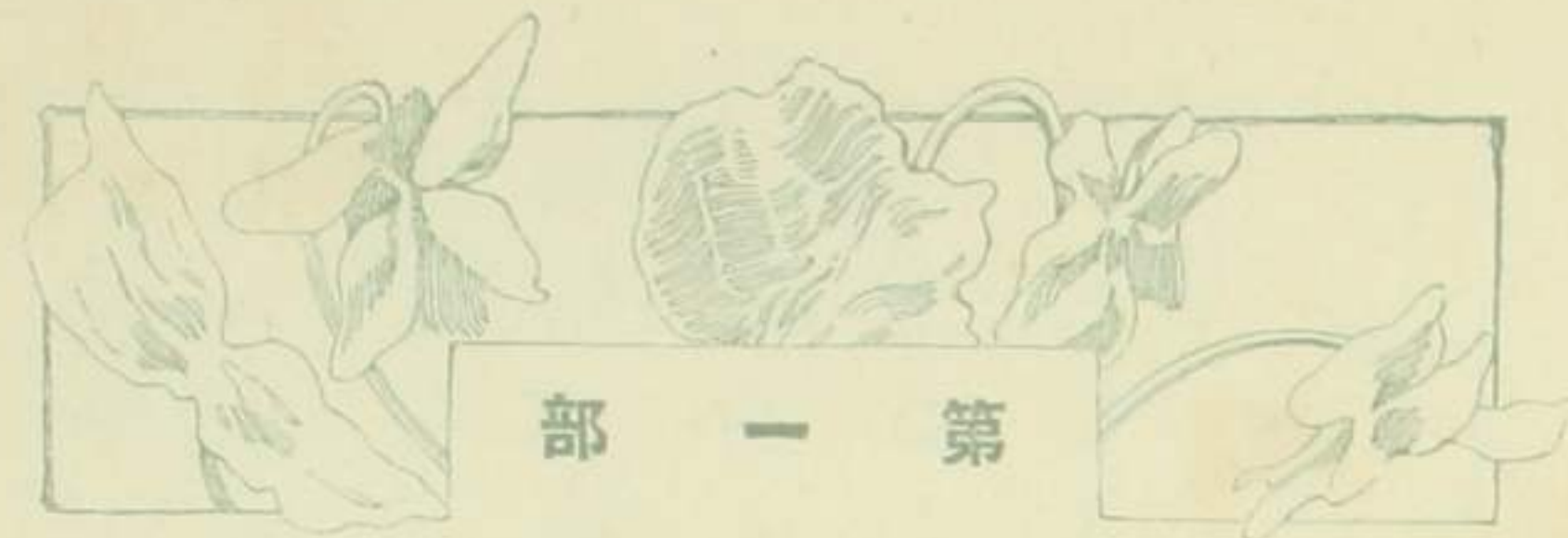
十五



部一第

そをちりばめて雛菊ひなぎく、
 昔話むかしはなしの「しやくまゆり」、
 鈴すずの花はななど、日入ひいりなば
 白しろき、紫むらさき又また青あおき、
 天幕てんまくとなり螢火ほたるびの
 夜露よつゆをおほひふせぎけり。

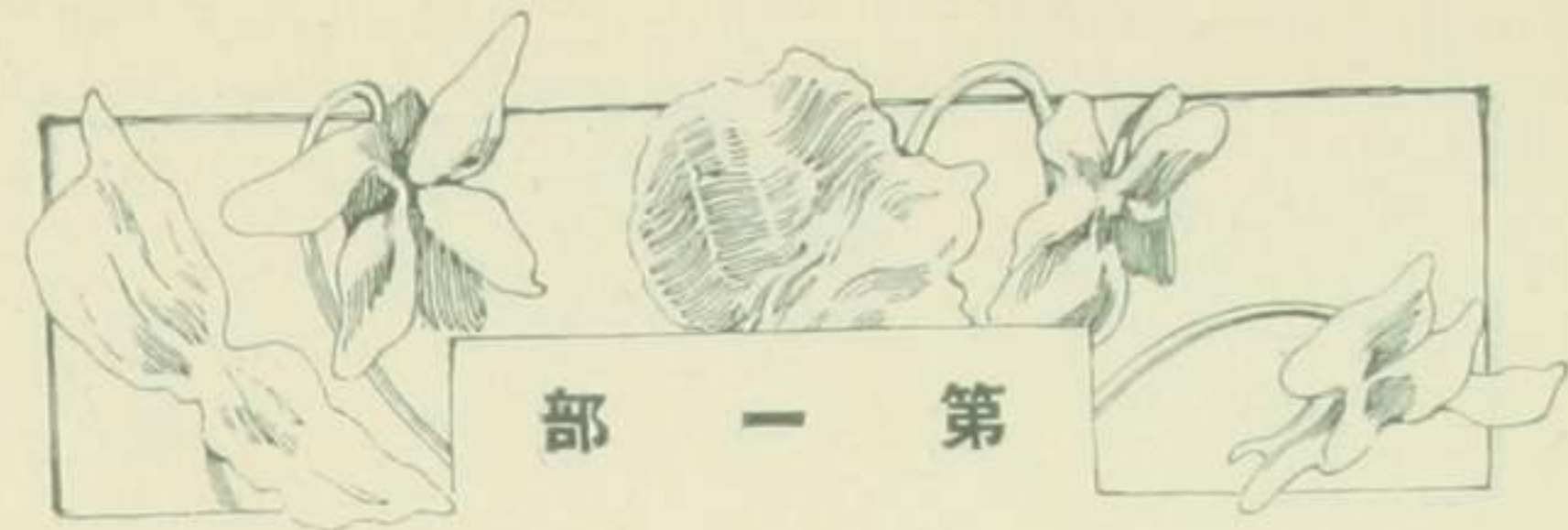
十四



部 一 第

其は皆是等各々は
 光を交へ香を注ぎ、
 若く愛するものどもを、
 「愛」と「若さ」の其息に
 纏はられつゝ充たされつ、
 いやなつかしく爲せばなり

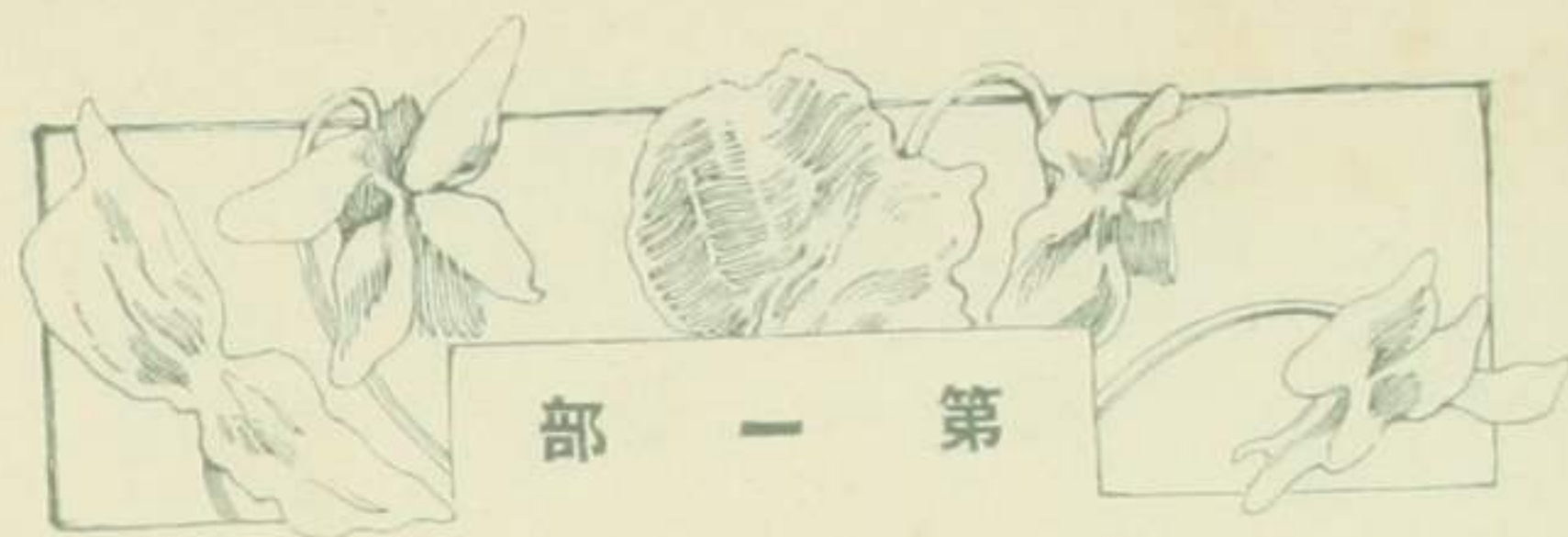
十七



部 一 第

科戸の風のそよ吹きに
 花は咲きゑみ——玉掘りの
 灯が隠れたる名玉を
 照らすか如く——輝きて
 日影麗朗に喜を
 皆々享けて樂しめり。

十六



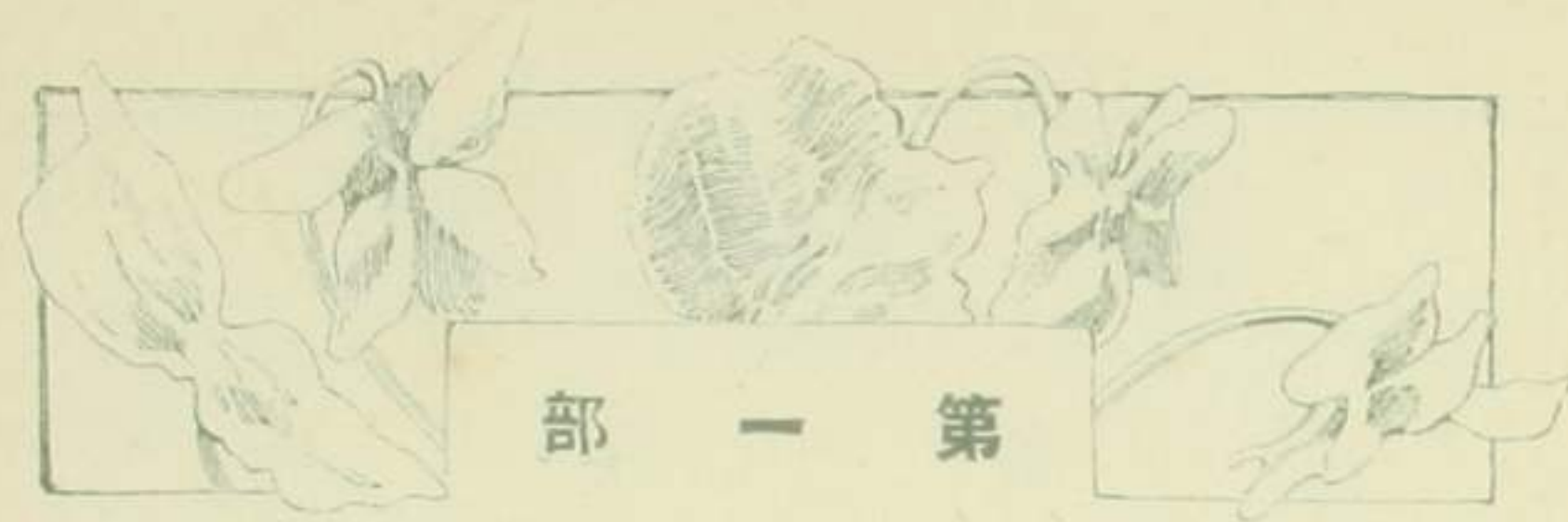
十八

されども葉より根幹まで、
 感ぜし愛の小さき實を
 與ふるのみの含羞草—
 凡てにまさり受くれども、
 只愛のみに事缺ける
 其等に愛を與ふなり—

十九

そは含羞草其身には
 華麗なる花も色
 も香も
 無けど、其愛
 「愛」の如、
 胸の深きに充ち溢れ、
 己の持たぬ美をこそは
 我身に得んと願へばぞ。



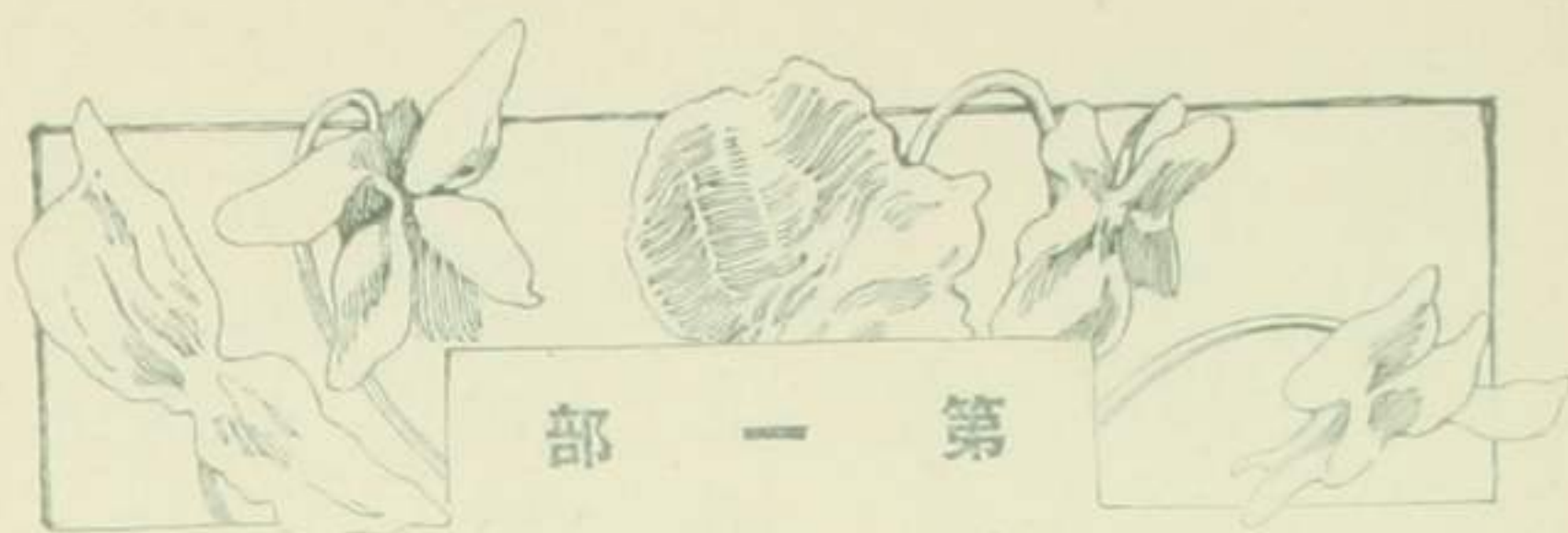


部 一 第

羽根ある蟲は、日の光
 いとうらゝなる其海に、
 黄金の船を浮けしごと、
 光と香とに満たされて、
 草葉の色のかゝやきの
 上に楽しく飛び遊ぶ。

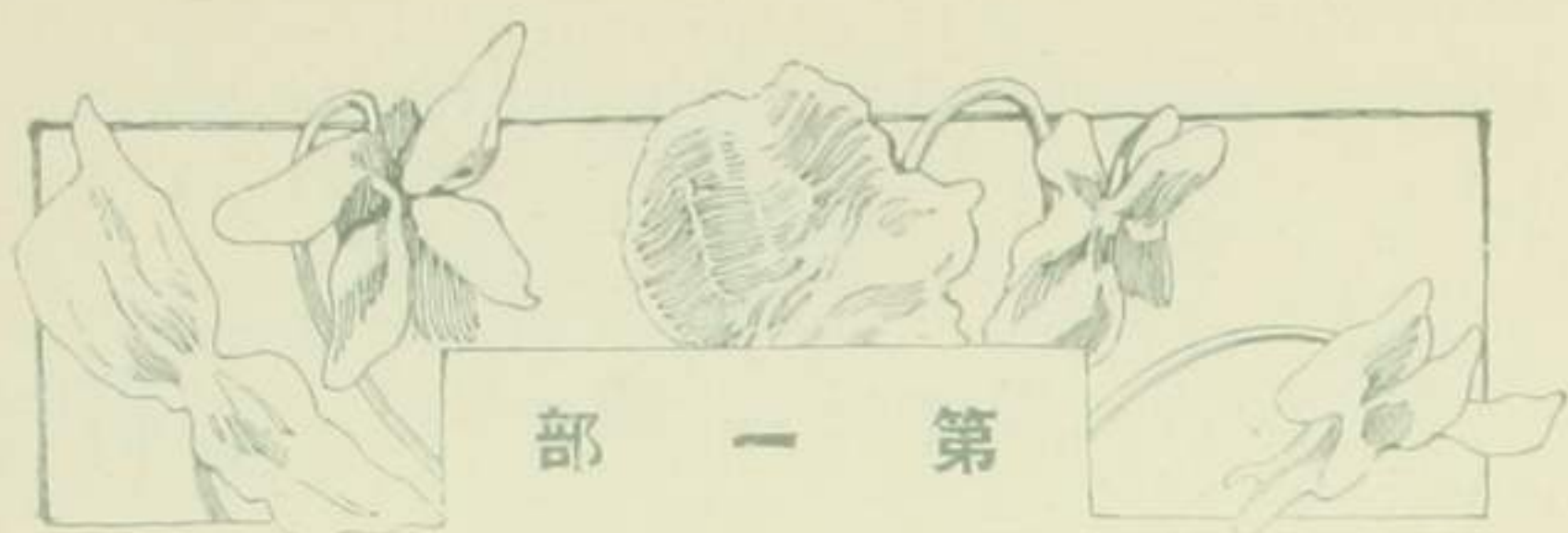
二十
 そよ吹く風はいと軽く
 数多さゝめく音曲を
 其翼より注ぎつゝ、
 千種の花の星光—
 其さまぐゝの色をしも
 遙にこそは送るなれ。





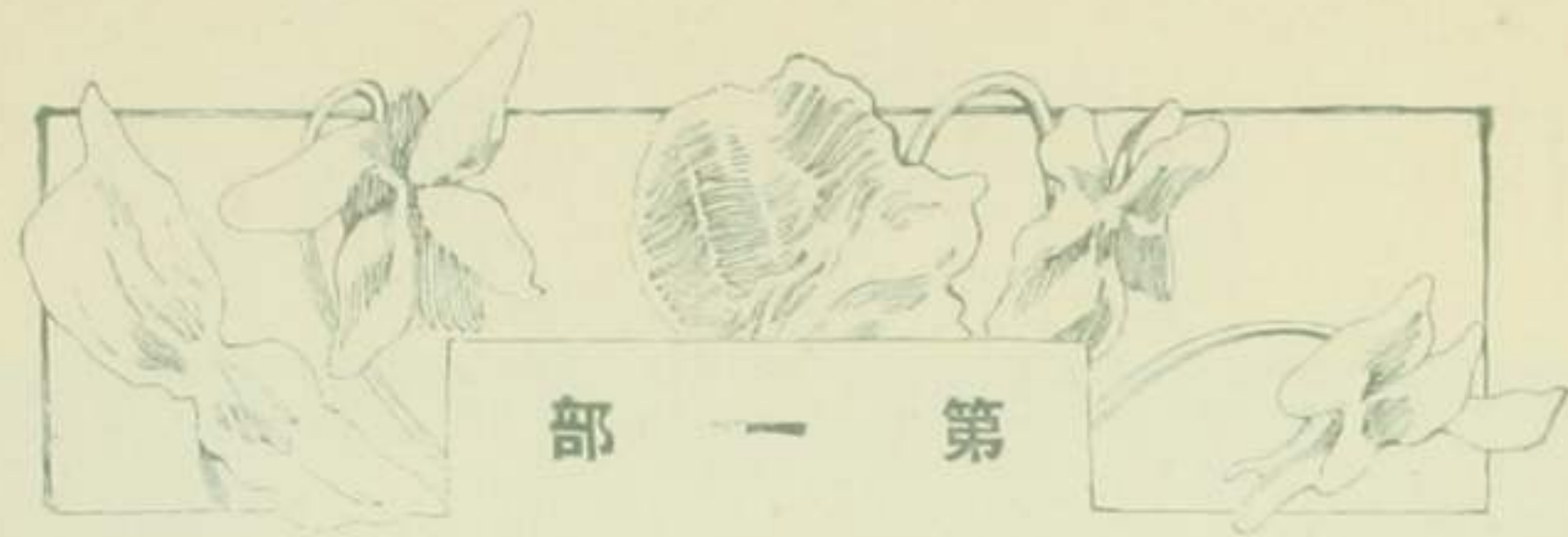
二十二

目には見えねど露の雲、
 花の中なる火の如く、
 日の御車の登りなば、
 いづれの雲もかほり充ち、
 星の世界を精霊の
 さまよふ如き思ひあり。



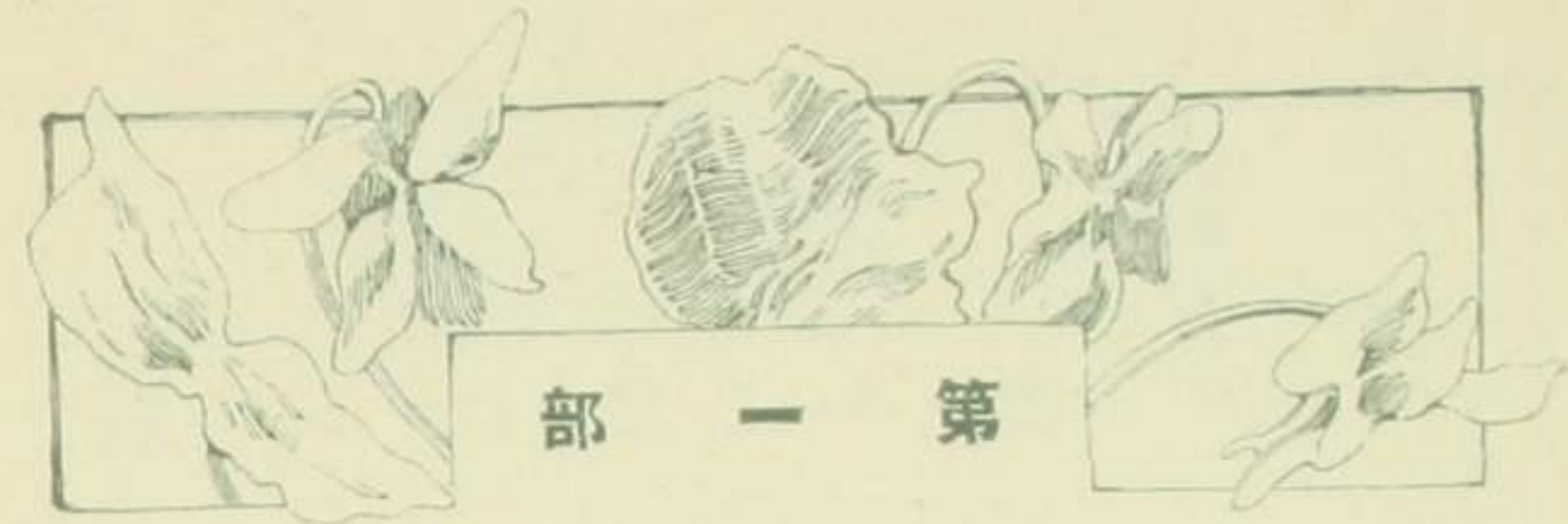
二十三

まばゆき眞晝立昇り、
 ふるひ動ける野馬は、
 温くき地上の海にして、
 音も、かほりも、かゞやきも、
 一つ流の葦のごと
 皆其内に動きつゝ。



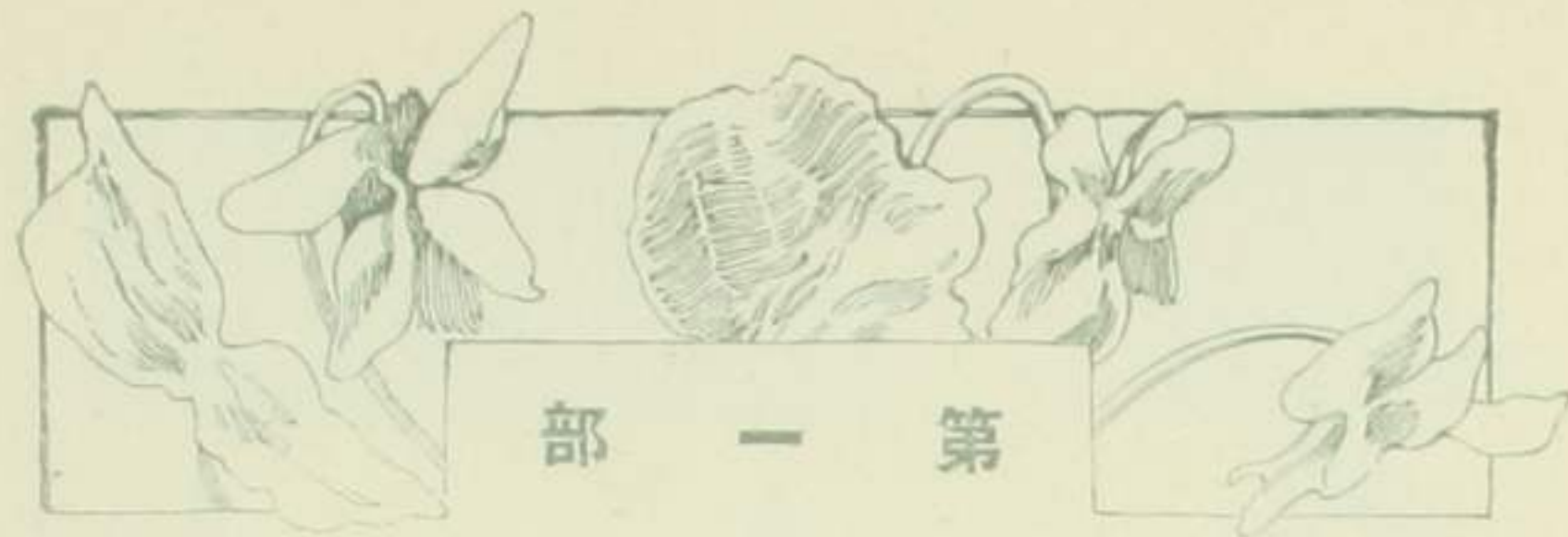
空^{そら}ゆ黄^{たそ}昏^{がれ}降^{くだ}りなば
 物^{もの}皆^{みな}休^{やす}み、空^{くう}氣^きはも
 愛^{あい}に充^みち満^みち、光^か耀^{やう}は
 いと少^{すくな}きも喜^{よろこ}びは
 いや深^{ふか}くして、晝^ひの帳^と幕^{はり}
 眠^{ねむ}りの世^よよりおつるなり。

二十五



含^ね羞^{はり}草^{くさ}にと皆^{みな}々^々は
 樂^{たの}し喜^{よろ}悅^{こび}運^じばんと
 事^{つか}へいそしむ天^{てん}使^しか
 晝^ひはひねもす遅^{おそ}き日^ひに
 長^の閑^どけき空^{そら}にたなびける
 風^{かぜ}なき雲^{くも}の如^{ごと}きかな。

二十四

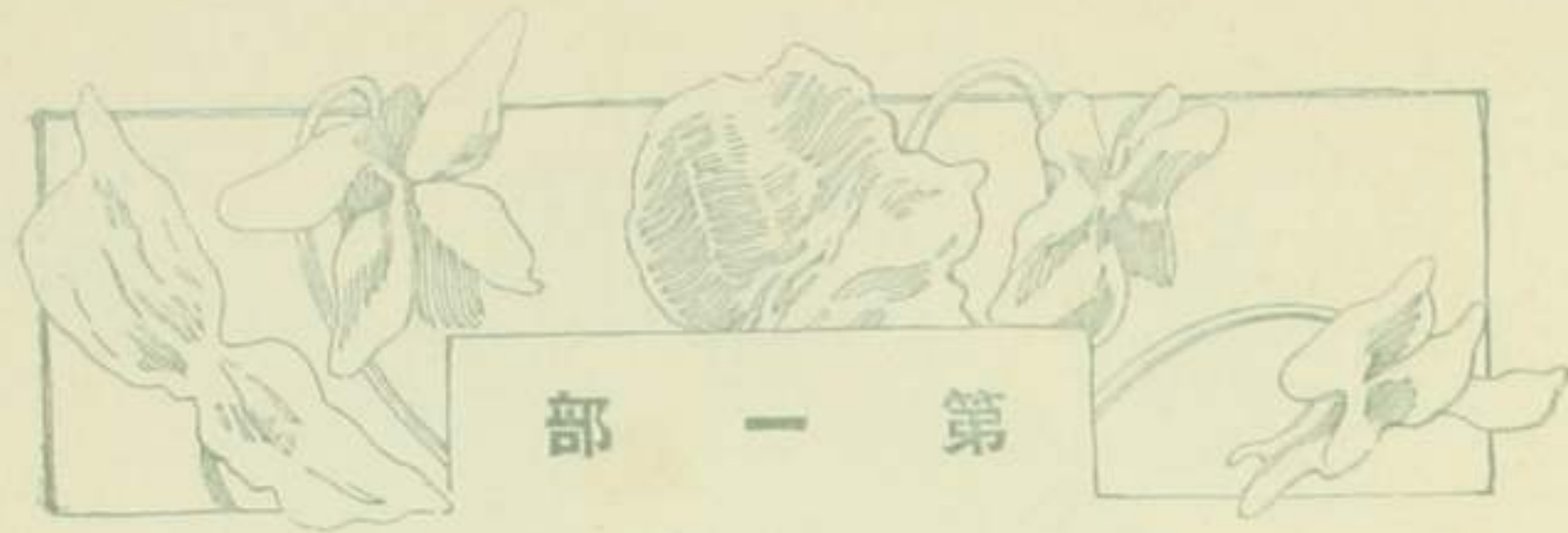


獸も鳥も又蟲も、
 音もあらざる静かなる
 夢の鹽路に沈みつゝ、
 其寄る波は打よせて
 「意識」の砂に判押せど、
 印は消えて跡もなし。

二十六



夜



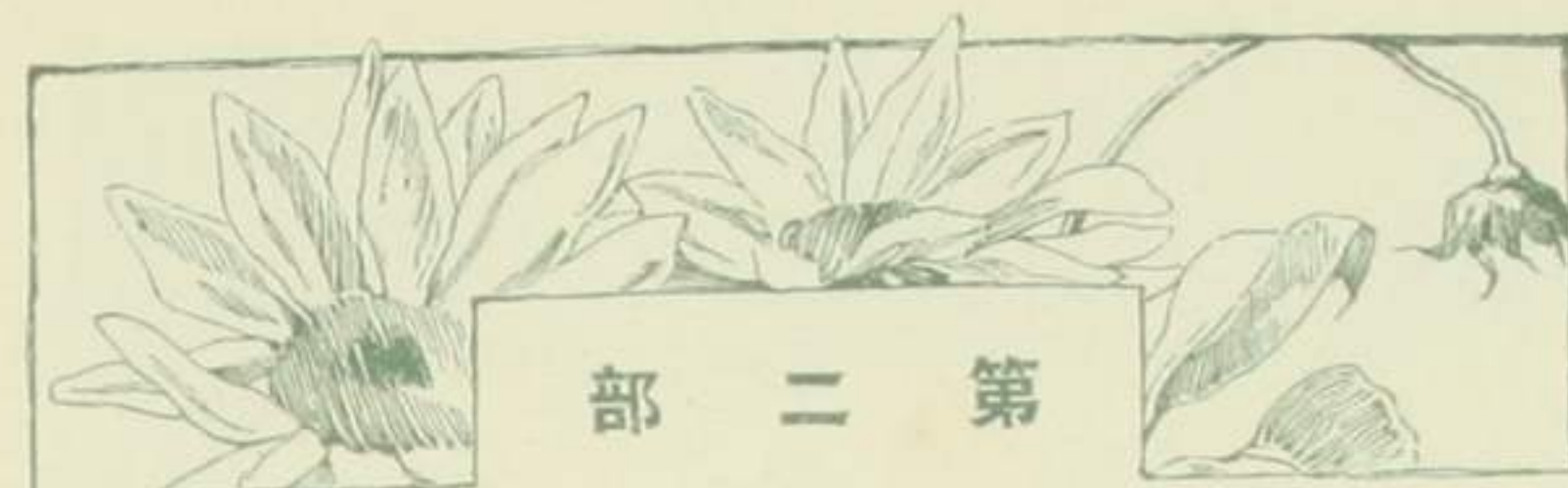
やすみの胸にいや始
 引き取らるゝは含羞草
 晝のたのしみ打つかれ、
 いとかわきも寵兒にて、
 夜の抱擁の搖籃の
 内にゆられてねむるなり。

二十八



二十七

(ナイチンゲールの聲のみは、
 日さへ暮れなばいと妙に
 木立の中に囀りつ—
 含羞草見る其夢に—
 節面白き極樂の
 歌は交り通ひけり)



第 二 部

いと樂たのしかる此園このに

一ひとの力ちからうじはきて、

エデンの園そののエヴのごと

花はなは目めさむも夢ゆめみるも、

星ほしの御空みそらに神かみのごと、

そを治おさむなる美びの女神めがみ—



朝あさより夕ゆふに至いたるまで
 園そのを見みまもりめでぬれば、
 地ち*上の天てんの星ほしはしも
 夜よるざり空そらの燈ひの如ごとく、
 此この手た弱をや女めの足あし下もとに
 笑あはみつゝ、頭かしらもたぐなり。



女をんなの内うちのすぐれたる
 手て弱をや女め一人ひとり、其その身みには
 可か愛あいき心こころゆきわたり、
 姿すがたふるまひ作り成なし、
 大おほ海うみ深ふかき底そこひにも
 海うみ*の花はな「さく如ごときなり。

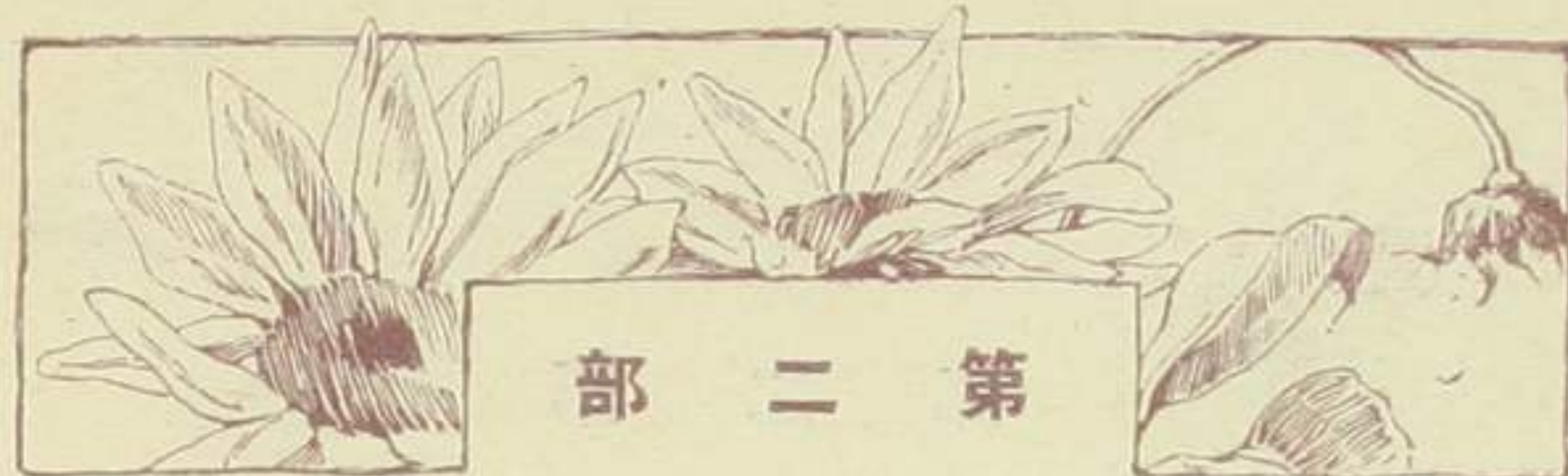


部 二 第

此世の人の友なきも
 四
 ふるへる息と赤らめし
 頬とは「朝」がねむりをば
 女のみより吸ひ取らば
 女の夢は極樂に
 目さめ居りしを語るなり。



朝



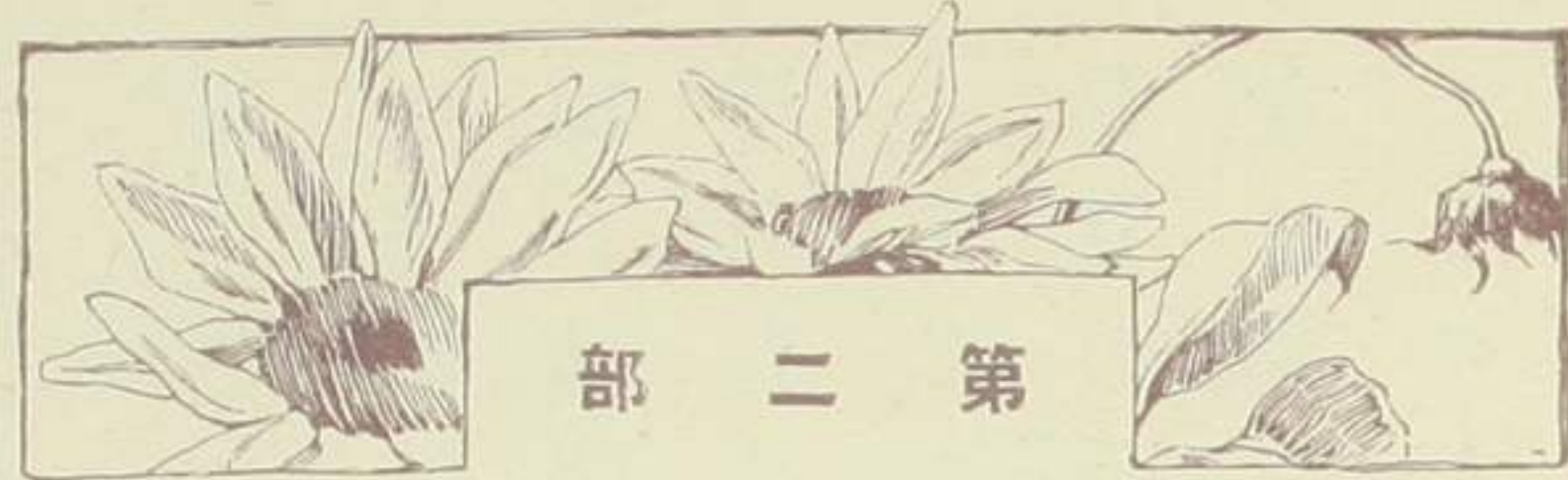
五*

そは此女美しき
 星なほ目をばさませる間、
 輝く靈は天降り来て、
 女の側に今もなほ
 さまよへれども、日の光
 蔽へば見えぬ如きかな。



六

踏みつけられし草をしも、
 其をあわれむは手弱女の
 胸の呼吸に之れを聴け—
 風の往來は樂さを
 こゝにもたらし來つれども
 思を後に残しけり。



部 二 第

樂しき御園花みなは
 この手弱女の足音を
 聴きて何れも喜ばん。
 其あたゝけき指よりは
 精神は凡ての花の身に
 來らんことは疑はじ。

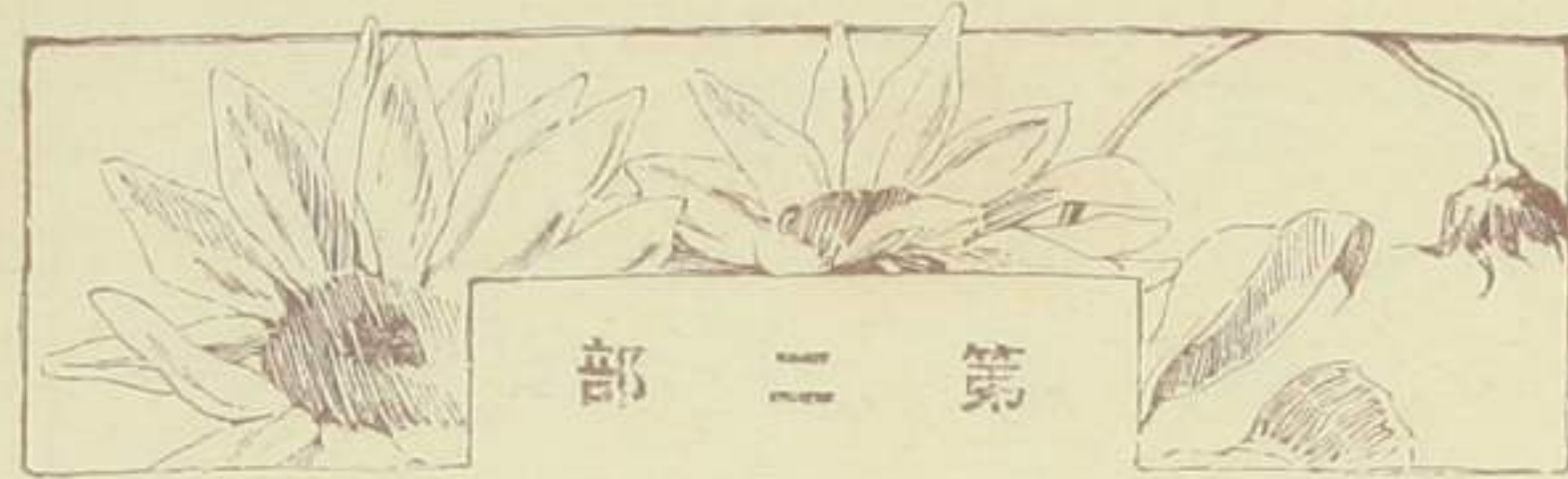
八



部 二 第

この手弱女のいと軽く
 踏み付けにたる足跡を、
 房なし垂るゝ黒髪は、
 草の葉末ゆなで消して、
 緑も深き海原に
 うらゝに亘る風のごと。

七



此^{この}手^た弱^を女^めの優^{やさ}し手^ては、
 竿^{さほ}と柳^{やなぎ}の糸^{いと}をもて
 花^{はな}も莖^{くき}をも扶^{たす}くなり。
 たとひ己^{おのれ}の子^こなりとも
 これに優^{まさ}りていつくしみ
 めで、はごくみ得^うべきやは。

日^ひに萎^{しな}へたる草^{くさ}木^き
 には
 涼^{すずし}き流^{ながれ}汲^くみ来^{きた}り
 澄^すみたる水^{みづ}をそ
 そぐなり。
 夕^{ゆふ}立^{だち}の雨^{あめ}重^{おも}ければ、
 女^{をんな}は花^{はな}の杯^{さかづき}ゆ、
 たまりし水^{みづ}をこぼすなり。



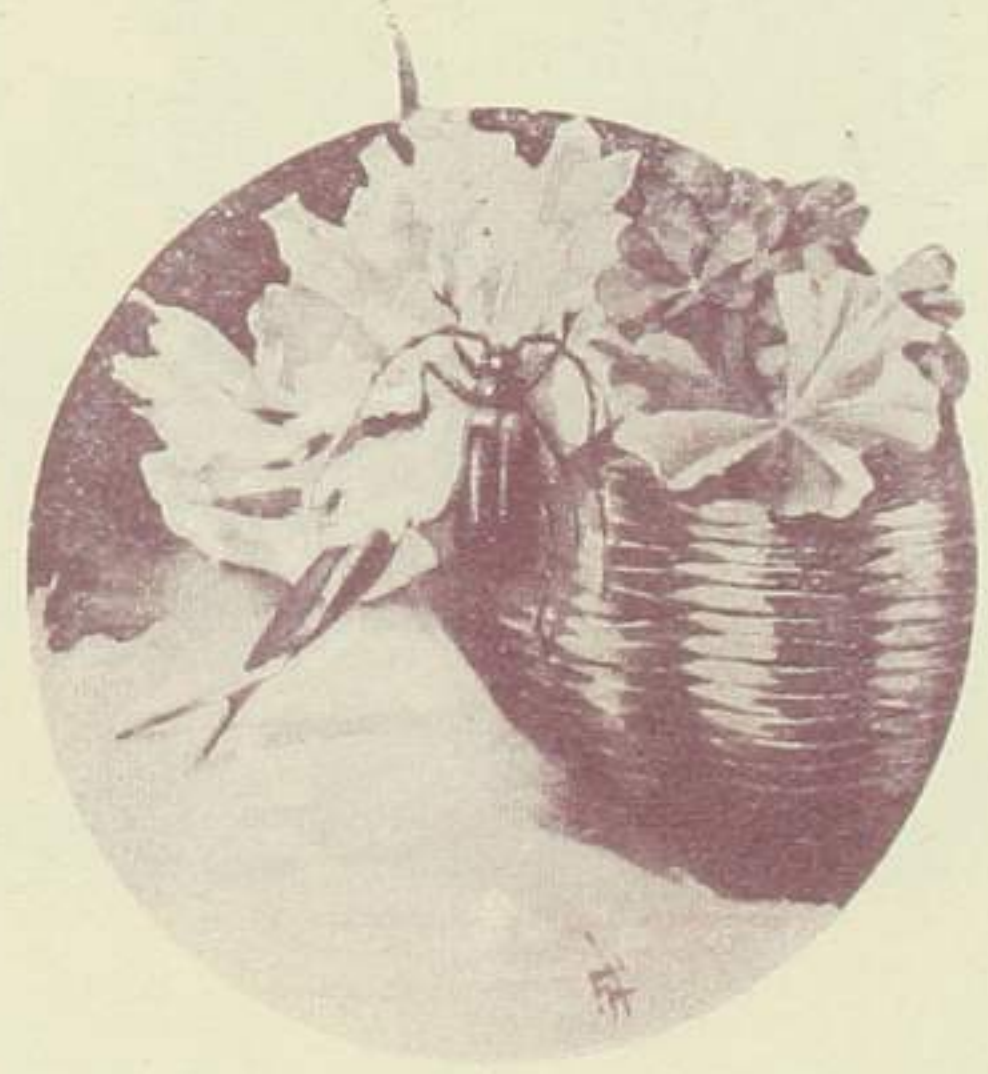


部二第

棄て放つべき蟲の爲め、
 この手弱女の優し手は、
 籠に新の草の葉や、
 野花もともに摘み入れぬ—
 たとひ此蟲悪しくとも
 罪なきものにあるなれば。

十二

草木害ふ飛ぶ蟲も、
 地をはふ蟲も、或は又た、
 醜き様のものどもは、
 女は籠に取り入れて、
 遙か離れし森の内
 運びてこれを棄て去りね。



十一



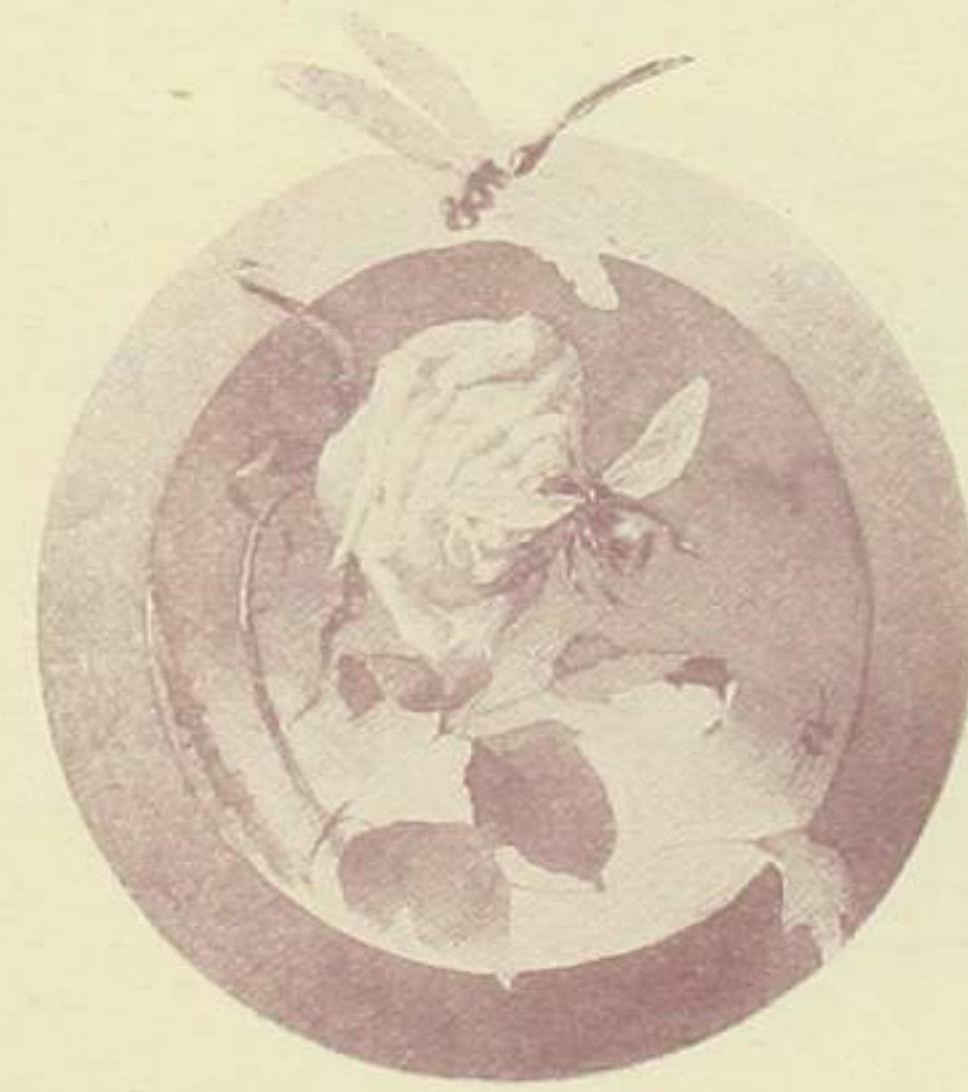
部 二 第

生れぬ前の墓の内
 來ん世を夢む胡蝶をば、
 檜の香かくはしき
 滑らに黒き樹皮の端に
 めぐり懸れる其まゝに
 女はこれをさしおきぬ。

十四

蜜蜂、或は電の
 如く飛び交ふ蜉蝣や、
 花の唇接吻つゝも
 害ひ爲さぬ夫等をば、
 此手弱女は身に事ふ
 御使とこそ思ふなれ。

十三





部 二 第

十五

此美しき手弱女は、

まだ初春の早くより

楽しき夏の頃までも、

いそしく園を守りにしか、

一葉黄ばみ落つる前

いともあへなく死しにける。



部 三 第

第三部

三日の間此園の

花はも、月の目さむべき

時に御空の星のごと、

またズス并エスの煙の中、

上に月姫浮ぶ前

ハイエーの波、その如し。



部 三 第

力なき音重き息
 言葉はなくて皆人が
 しづく歩む野邊送り
 冷く重くしめりたる
 香は櫃洩れ來り
 いとゞあわれを添えにける。

三



部 三 第

四日となりぬ—含羞草
 葬の歌を聴きにけり—
 遺骸運ぶ人々の
 ねり行く重き足の音
 深くしづめる悲しみの
 弔ふ人のむせび泣き。

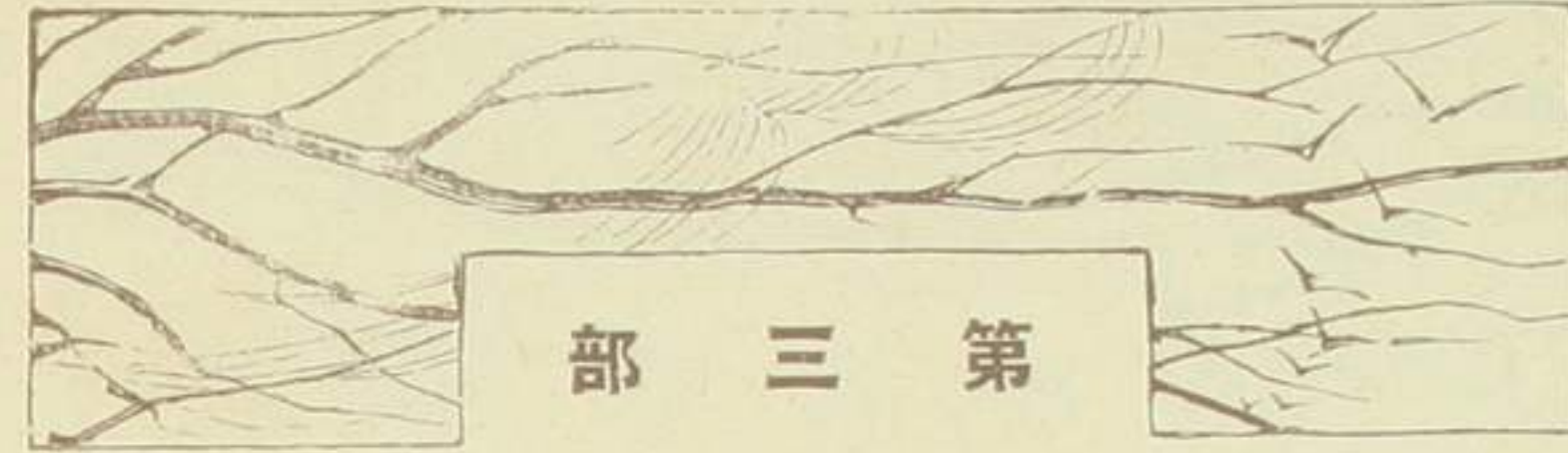
二



部 三 第

美^{うつく}しかりし此^{この}園^{その}も
 今^{いま}は寥^{さび}れて一^{たま}魂^{しひ}の
 去^さりにし屍^{かばね}一^{ねむ}眠^りりたる
 如^{ごと}くにありし美^びも變^{かは}り、
 泣^なくこと知^しらぬ人^{ひと}さへも
 身^みを震^{ふる}るはずに至^{いた}る様^{さま}。

五



部 三 第

小^お暗^{くら}き草^{くさ}も其^{その}花^{はな}も、
 亡^{なき}から送^{おく}る人^{ひと}々^々の
 過^すぎ行^ゆく跡^{あと}は玉^{たま}を爲^なす
 涙^{なみだ}の露^{つゆ}にきらめきつ、
 其^{その}悲^{かな}しさを風^{かぜ}はしも
 松^{まつ}の梢^{えだ}よりいたむなり。

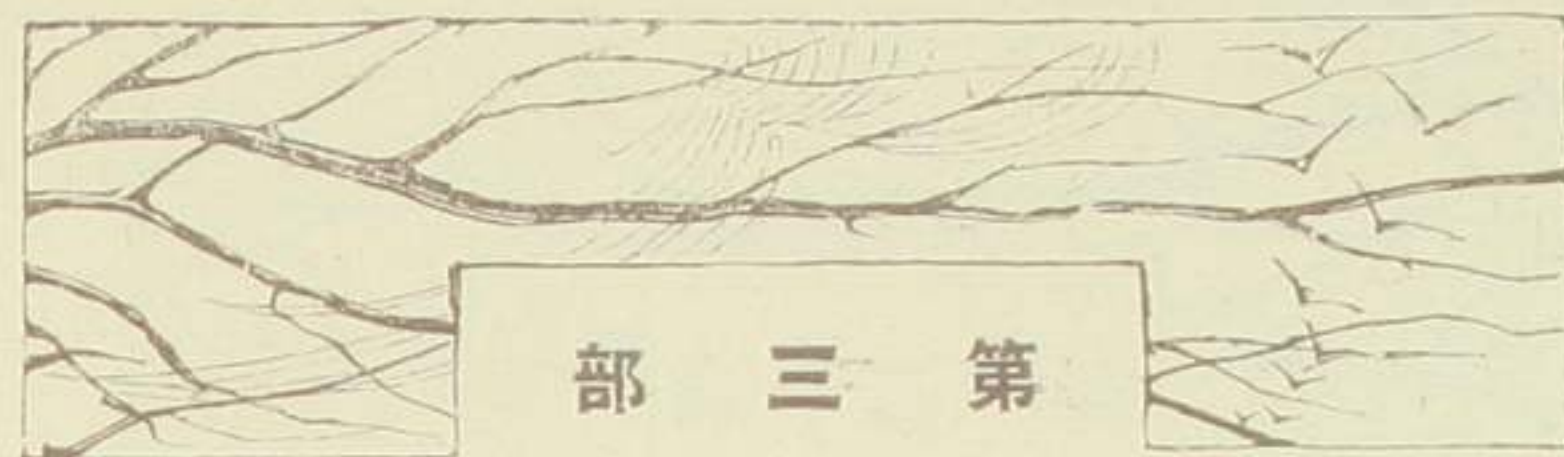
四



部 三 第

七

薔薇の花は紅の
 雪ふりにしが如くにて、
 苔に、芝生に、散り敷けり。
 頸垂れ弱る百合の花、
 色青白くさめはて、
 死しぬる人の肌なれや。



部 三 第

六

早くも夏は秋に入り、
 晝の日影はうらゝかに
 照らして夜の秘密なる
 其掠奪を嘲れど、
 霜は朝のたゝ中に
 乗り込み来る世となりぬ。



枯れたる木の葉―赤に、
 茶に、
 黄に、灰色に、死人なす
 白きは―幽霊打群れて
 吹く木枯に飛ぶ如く、
 其物すごき響には
 鳥も怖れて驚きぬ。

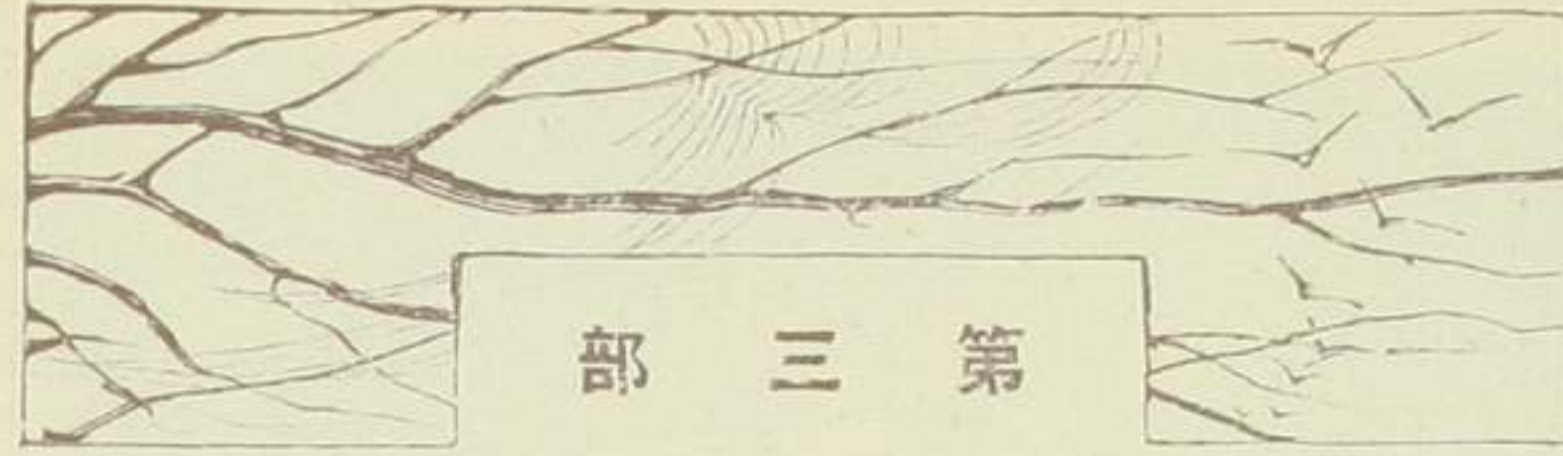
九



部 三 第

色花やかに香は妙に―
 露の白玉養ひし
 花の中にも優りたる
 印度の花も、日々日に
 一重一重に朽ち去りて
 たゞの土とぞなりにける。

八



部 三 第

十

烈しき風は吹きすさび、
 醜草生ふる其地より
 羽根ある種子を目さませば、
 美き花咲かん柄も莖も
 着きまつはられ、諸共に
 朽ちて土とぞなりにける。

流に咲ける水草の
 花も莖

十一

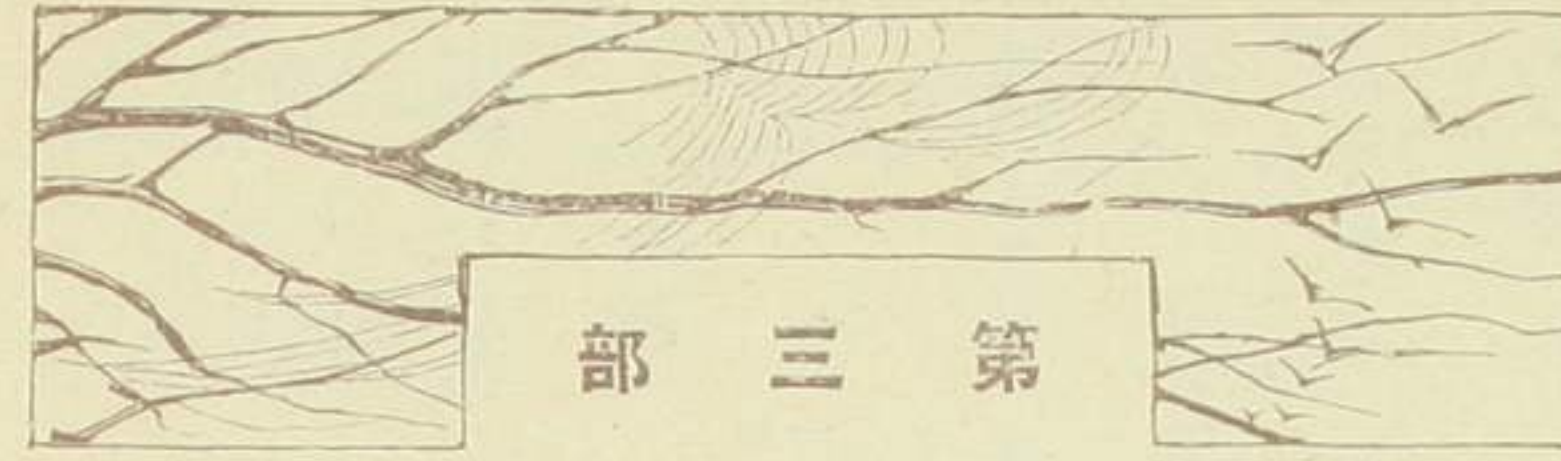
渦まく水に今此方
 又たは彼方に流されて、
 上なる土地に草や木の
 なやめる様に異ならず。





風かぜの時じ節せつと又またた雪ゆきと—
 二ふたつの時ときの間あひだには、
 しこの醜しこ草くさはびこりて、
 荒あらき其その葉はは汚し點みけがれ、
 さも水みづ蛇へびの腹はらのごと
 蛙かわずの背せなの其その如ごとし。

十三



かて、加くはへて雨あめ降ふらば、
 折おれくだけたる莖くきはしも
 くねり曲まがりて路みちもせに
 葉はも散ちりはてしやどり木きの
 作つくりなしたる園あづ亭まやも
 くづれ落おちけり、花はなも皆みな。

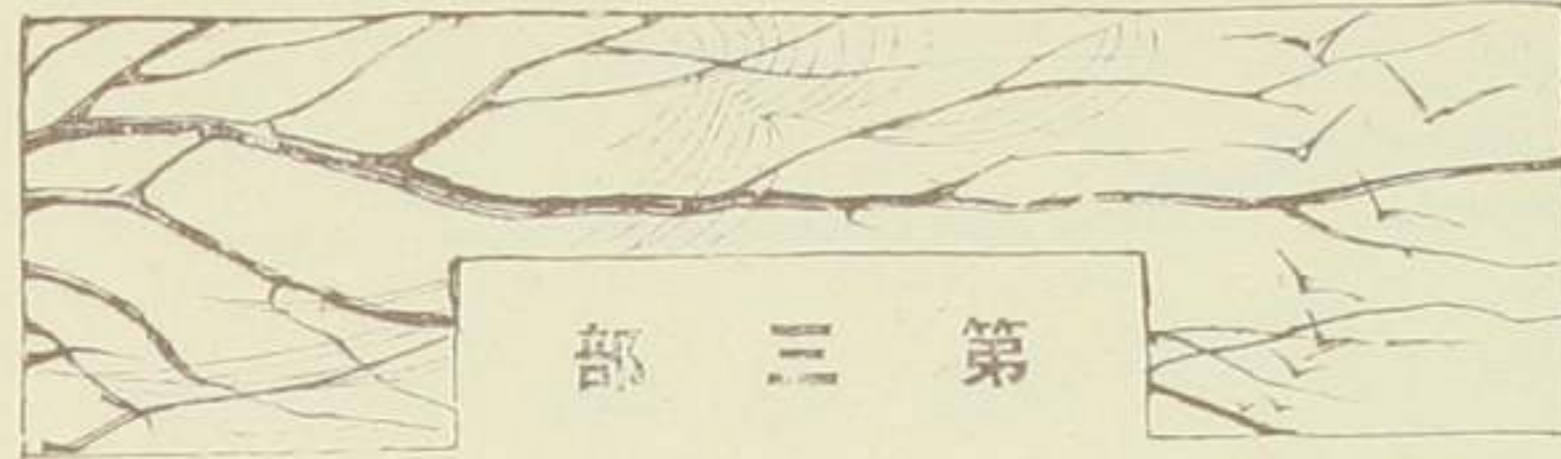
十二



部 三 第

名を言ふだにも我歌の
 心地を悪しく爲す草は、
 恐ろしきまではびこりて、
 刺に腐爛に、水腫れに
 鉛の如き色を爲し、
 露青白くきらめけり。

十五



部 三 第

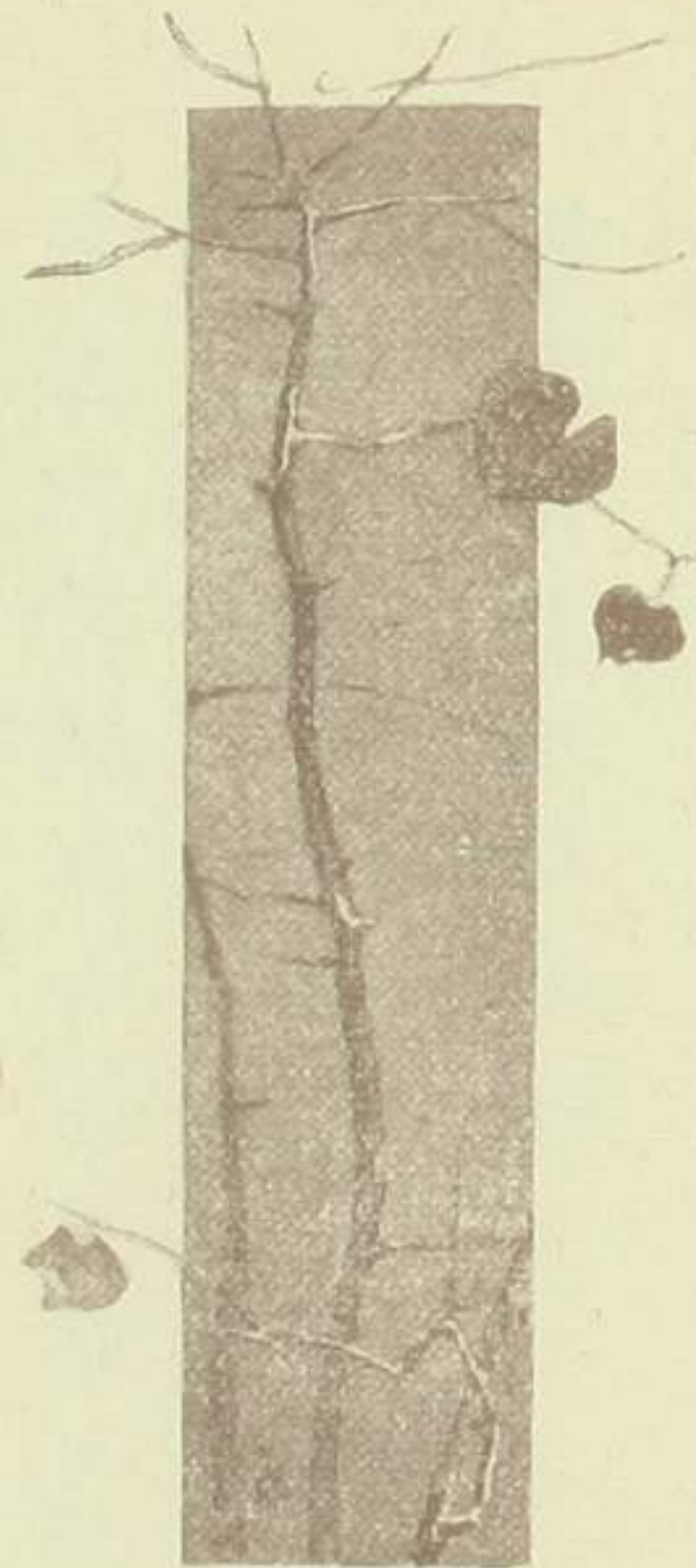
薊、蕁麻、酸摸に、
 莠、菲、沃、斯、生、ひ、茂、り、
 水つき濕れる矢鳩答は
 長き空の脛を伸べ、
 吹き來る風も悪臭に
 満ちて空氣もむせぶなり。

十四

菌や黴は霧のごと、
 寒き濕れる地に生えて。
 青ざめはてし肉の様―
 腐れたゞれし死人が
 「成長」の氣に生かされて
 起ちあがるにも比ふべし。



散り敷く花も苔に朽ち、
 残りける莖は
 突き立ち
 て―
 刑の柱―罪
 人の
 肉の残は今も尙ほ
 高く懸りて四邊吹く
 風醒くなす如し。





部 三 第

風かぜ靜しづかなる其その時ときは、
 毒どく氣きは斷たえず立た騰のほり、
 朝あさには其そを見み眞ま晝ひるには
 其そをば觸ふれつゝ我われの身みは、
 夜よるは如い何かなる星ほしとて
 散ちらし得え爲なさぬ闇くら黒きなり。

十九



部 三 第

根ね株かぶ醜しこ草くさ水あほ綿みどり
 いたくも纏もつれからまりて、
 小お川がはの水みづをよどませつ、
 柵しがらみなせる水みづ草ぐさの
 根ねは水みづ蛇へびと蟠わたがまり、
 流ながれの口くちを堰せき止とめぬ。

十八



部 三 第

禁制いまたしめられしものゝこと
 泣なき悲かなしめり含羞ねむりぐさ草
 ともに並ならびて疊たむ葉はの
 臉まぶたにたまる其その涙なみだ、
 膠にかはの如ごとく凝かたまりて
 白しろ黴かび菌びとこそ變かはりけれ。



部 三 第

油あぶらの如ごとき流星りゅうせいは
 枝えだより枝えだに眞まこと晝ひる間まに
 人ひとに見みられず這はひ移うつり
 或あるは飛とび行ゆき一泊とまりたる
 凡すべての枝えだは白しろ黴かび菌びに
 何いづれも焼やかれ害せきはる。



部 三 第

實けにく冬ふゆは來きたりけり、
 其それが鞭しもとは風かぜにして、
 ひび切きれわれし彼かれの手てを
 其その唇くちびるに押おし當あてつ、
 山やまより瀧たきを裂さき破やぶり、
 手て錠ぢやうの如ごとく帶おびに鳴なる。

二十三



部 三 第

また、く内うちに葉はは散ちりて
 疾はや風ちの重おもき斧おのにより
 枝えだは忽たちまち切きり去さられ、
 其その樹きの汁じうは根ねにかへり、
 脈みやくうちやめし心しん臟ぞうに
 血ちのちびみ込こむ如ごときなり。

二十二



部 三 第

生ける死人の形なる
 醜草などは霜を避け
 土地の下にと落ちのびぬ
 其枯れ凋み又た不意に、
 遁るゝ様は幽霊の
 消えてあとなき如きかな。

二十五



部 三 第

其爲す息は鎖にて、
 音は無けども地も水も
 空気も、これを縛りけり—
 駟馬に鞭うち猛然と
 来る勢は北海に
 荒る疾風の十倍力。

二十四



部 三 第

先づ、霜解けの雨降れど
 重き水滴は枝毎に
 再び氷り固まりぬ。
 氷りし露は蒸し上り、
 又た霜解けの露となり、
 再び雨と降り來なり。

二十七



部 三 第

含羞草生ふ根方には
 食を得ずして土龍
 また野鼠は死してけり。
 空より鳥は凍え落ち
 葉も枯れはて、赤裸なる
 枝に懸りてとまりけり。

二十六



部 三 第

冬も過ぎ行き春來れど、
 葉もなく荒れて含羞草
 菌、酸摸、曼陀羅華、
 莠などは生え出で、
 遺骸入るゝ骨堂ゆ
 死人起き出し様なれや。

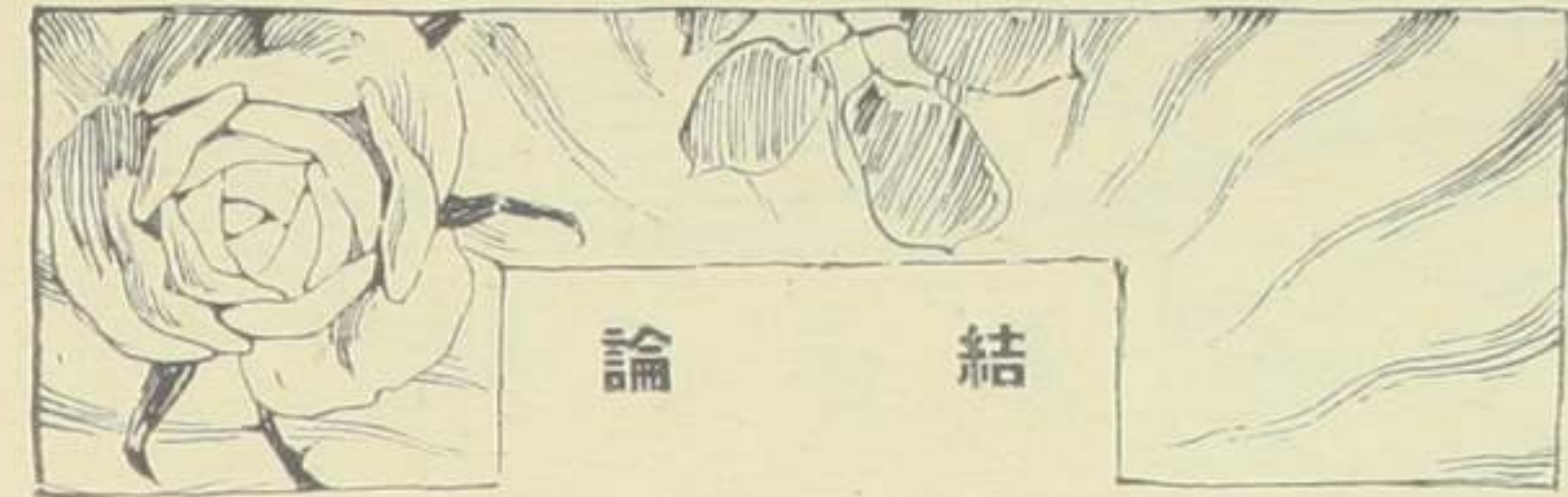
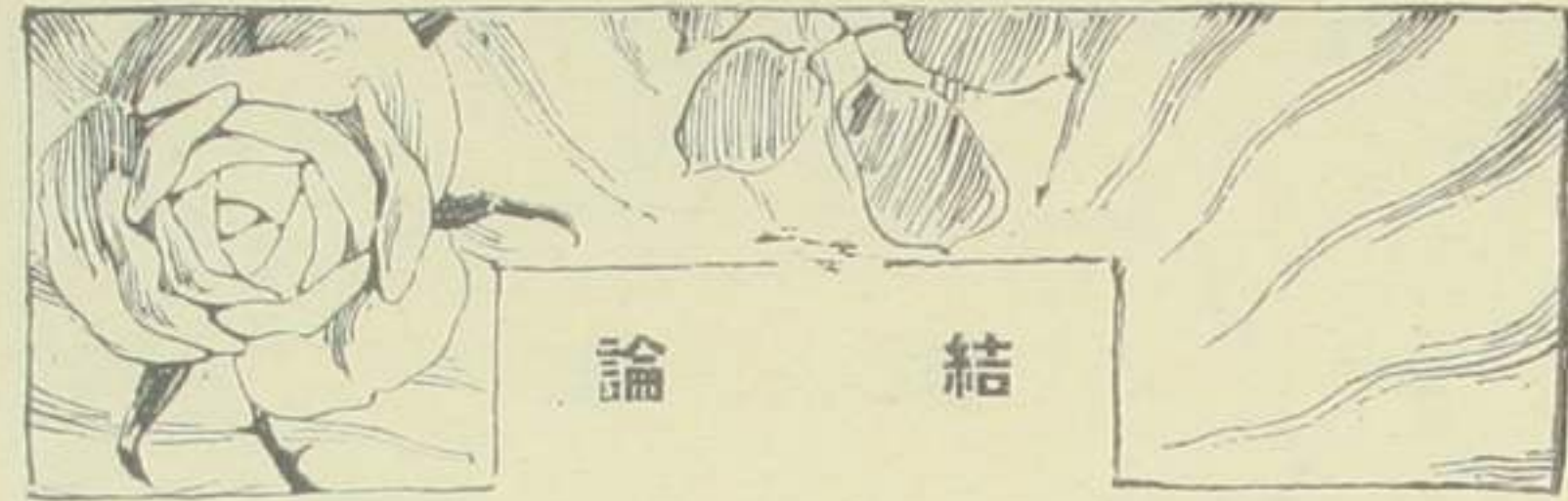
二十九



部 三 第

猛り狂へる北風は、
 死せし嬰兒狼が
 嗅ぎ出だしたる如くにて、
 たをゝに重き硬ばれる
 枝を震はせ容赦なく
 握みつ折りつ摧きつゝ。

二十八



結論

げに含羞草或はまた
靈の如くに枝の内
やどり居るなるかのものは、
外なる形凋む前
此變化をば知りにしか
そは我れ知らず語り得ず。

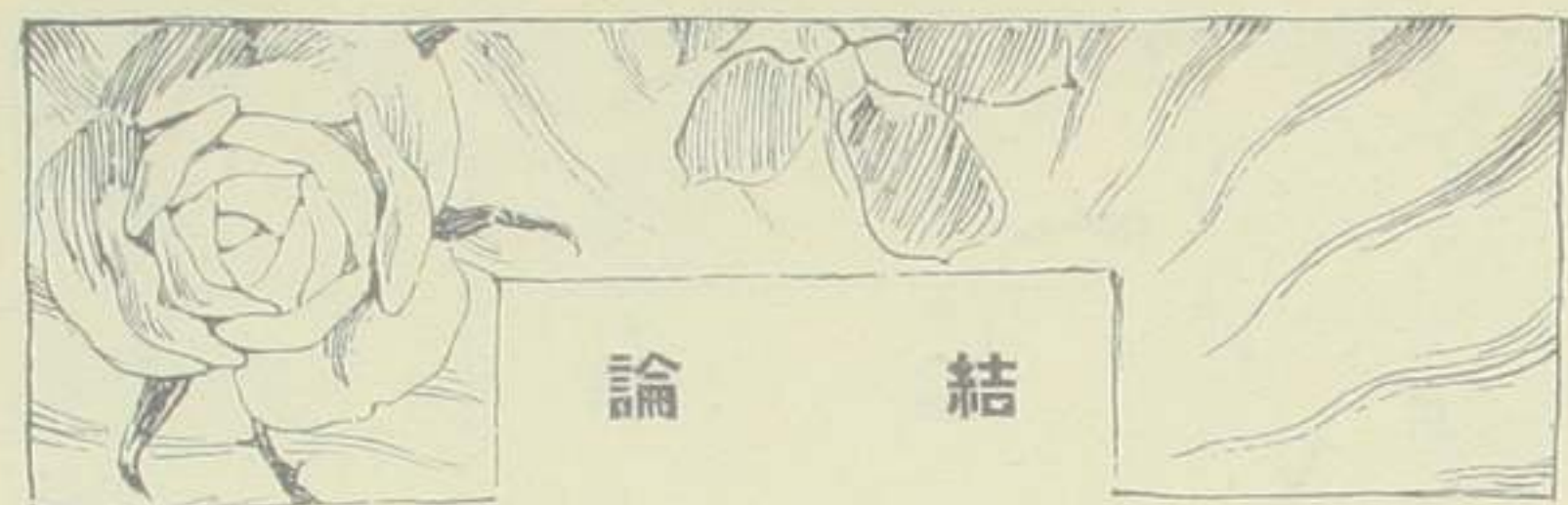
二

かの手弱女の柔和なる
心は、星の光なす、
愛を凡てにそゝぎしが
今や形骸より離るゝも、
「喜」残し行きにける
あとに「悲」あるべきか。



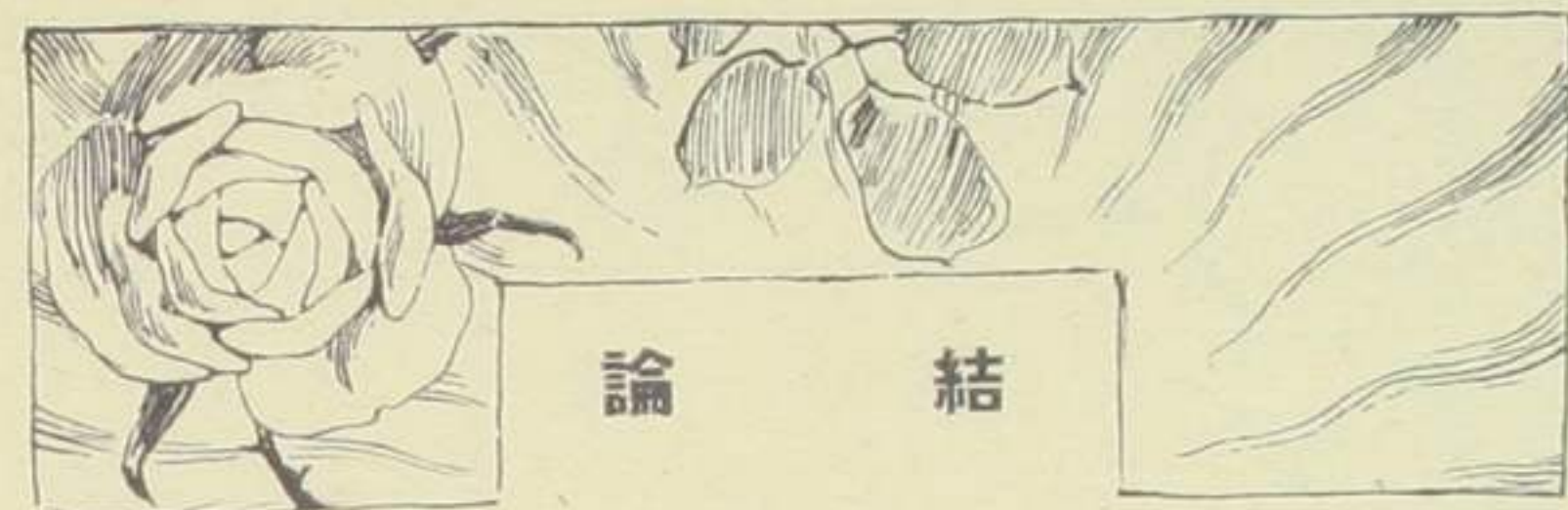
三

吾は然りと思ひ得ず。
 されども無知と誤謬と
 又た争鬪に充ち満ちて、
 「實在」なせるものはなく、
 凡のものは「観え」にして、
 吾身も夢の影の世に――



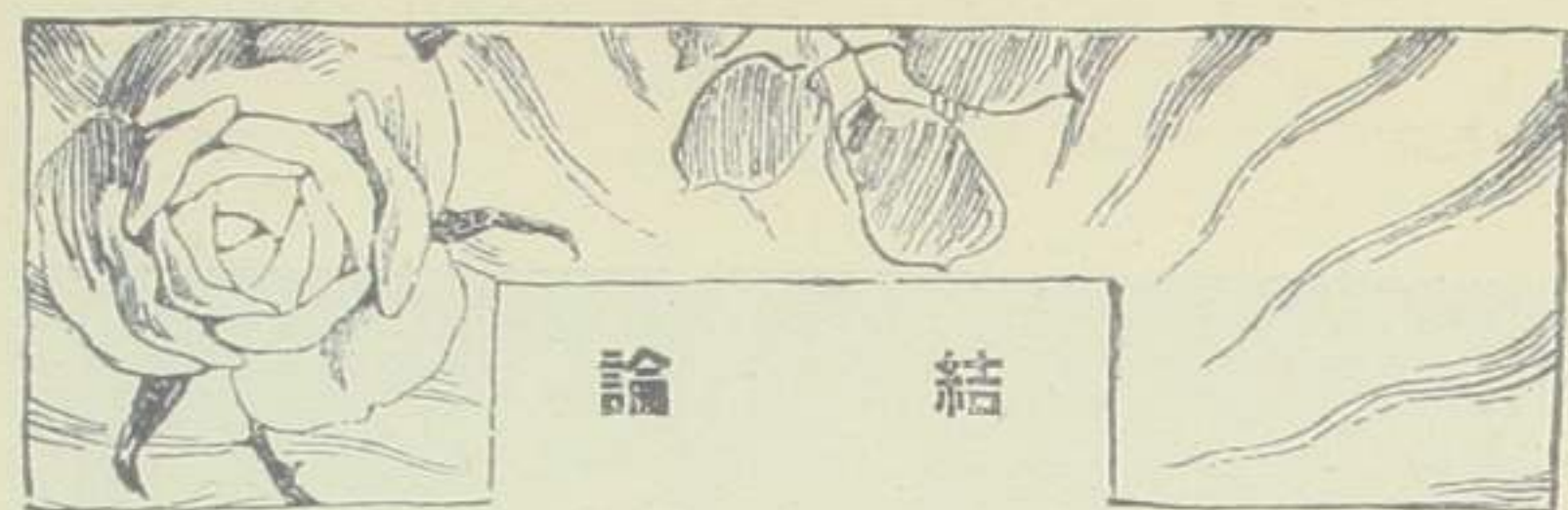
四

其他凡のものゝ如、
 死も亦假幻のものなりと、
 吾等はこれを認めつゝ、
 思ひあきらめ爲しもせば、
 是れぞ程よき悟にて
 而も樂しき心地する。



五

此美しき御園生も、
 此美しき手弱女も、
 凡ての美なる色も香も、
 實消えしに非ずして—
 變化したるは吾等なり—
 是等のものに非るよ。



六

これ—「美」と「愛」と「喜」は
 死なく變化も亦あらず—
 其等の有てる力はも—
 光に堪へず身自ら
 暗き吾等の五官より—
 遙か優れるものなれば。



心 と 愛

註 釋

○ナヤス女神かみ鈴蘭 (一ノ六) — ナヤス (Naius = Nainid) はアレシア神話の泉の女神なり。鈴蘭は英語の Lily-of-valley にて世間「谷間の姫百合」と稱するもの。

○ニンフ女神 (一ノ八) — (Nymphe) 山林泉水等に遊べる女性にして人間に非すと雖、神にも非ず、神の次のもの。或は精(山の精、泉の精の如きもの)なり。

○マイナス (一ノ九) — ケレシア神話の酒神デガニユソスの侍女にして、狂亂の如く杯を捧げて踊り舞ふなり (Maenias)。酒神の祭禮の巫女をもマイナス (Maenid) と稱す。

○昔話の「しやぐまゆり」 (一ノ十四) — 百合科の植物にし

て、花、黄なるは最と美、又た青白きあり。太古のクレシヤ詩人ホ
メーロスの詩中、此花陰府の草場に茂生せる由を言へるより
「昔話の云々」と云へるものゝ如し。

○(一ノ十八、十九) 含羞草——緒言「含羞草」及び「含羞草とプ
ラトーンの哲理」を見よ

○其愛「愛」のごと (一ノ十九)——其愛情や「愛」の神(エロイス
或はアモール或はキューピッドとも云ふ)の如しとの意味。

○日の御車の登りなば (二ノ二十二)——ケレシヤの神話
に據れば太陽の神馬車に乗りて東方より登るものと信ず。

○星の世界を精霊が (一ノ二十二)——蒸しのぼる、見えざ
る露の雲にかほり充ちて、花の四周にさまよう様を、天體衆星

の間を精霊が飛びさまように比したるなり。

○(二ノ一) 一つの力——緒言「含羞草とプラトーンの哲學」を
見よ。

○(二ノ五) 輝く靈は天降り來て——(一ノ二十二)と同様の趣。

○「海の花」(二ノ二)——英語 Sea-flower は「いそぎんちやく」と云
ふ放線狀の動物なり。されども其如く譯しては甚だ詩趣に乏
し、故に原名を文字譯して「海の花」と爲し置きたり。

○地上の天の星 (二ノ三)——地上の天とは圖のこと。こゝ
に謂ふ星とは花のこと。

○生れぬ前の墓の内 (二ノ十四)——蝶々のまだ繭に化せ
ずして、繭等の内にこもれる時のことなるべし。

○ゴス并ユス (三ノ一)——イタリア、ナポリの火山、其煙の内より月が登りて浮ぶ形容。

○バイエーの波 (三ノ一)——イタリア南部カンパニアの港灣 (Baie=Baiu=Baja) にして月待つ波の情を言ふ。

○靈の如くに枝の内、やどり居るなるかのもの (結論一)——植物の精神の如きものを謂ふ。

○「喜」残し行きにけるあとに (結論二)——「喜」なるもの(プラトインの觀念と見て)の獨立存在を認むる以上は「喜」をあとに残し置きし所には「悲」なしと云ふ意味なるが如し。

○實在なせるものはなく (結論三)——萬物は現象なり「觀え」なりと云ふにあり。

○結論 (六)——緒言、含羞草とプラトインの哲學を見よ。

明治四十年八月二十日印刷
 明治四十年九月一日發行

含羞草奥附
 (定價金七拾錢)



著譯者 東京府下淀橋町柏木三〇九番地 木村 鷹 太郎

發行者 東京市麴町區麴町一丁目三番地 宮 本 林 治

印刷者 東京市小石川區久堅町百八番地 山 田 英 二

印刷所 東京市小石川區久堅町百八番地 博文館 印刷所

發行所

東京市麴町區麴町一丁目三番地

武 林 堂

